長野県立歴史館

Nagano Prefectural
Museum of History

信濃の風土と歴史 3

中世の信濃

信濃の風土と歴史③

中世の信濃

長野県立歴史館

はじめに

日本の中世では、古代貴族による支配のあり方が否定され、新興の武士階級が支配する仕組みができあがりました。武士たちは土地と密着して農業経営をおこなうとともに、その領地を守るために武装して武芸にはげみました。信濃は古くから有数の馬産地で、鎌倉幕府の史書『吾妻鏡』にも多くの牧が記されています。領主となった信濃の武士たちは、こうした牧を基盤として強力な騎馬軍団をつくりました。

農業では水田で米と麦の二毛作をおこなうことが広まりました。また商品の流通が全国的にさかんになり、信濃にも中国の陶磁器、能登（石川県）や尾張（愛知県）の陶器がもたらされました。このような社会の変化のなかで民衆が生き生きと活動していたことは、当時の絵巻物をみてもよくわかります。

一方、中世は現在より気温が低い小氷期でした。稲作などの作柄は不安定で、しばしば戦乱のひきがねになったと考えられます。平安時代の末から仏教の末法思想が人びとの間に広まりましたが、中世の社会不安の中で浄土教や弥勒・地蔵信仰が盛んになり、仏教は大きく発展しました。善光寺も鎌倉時代に源頼朝によって再建されるなど官寺なみの大寺院になります。『一遍上人絵伝』をみると、当時の門前町のにぎわいがわかります。そのほか信濃では「戸隠三千坊」といわれた戸隠山、信濃一宮であった諏訪大社などが人びとの厚い信仰を集めました。

『信濃の風土と歴史』③は、大きくゆれた信濃の中世を善光寺信仰を中心に、やさしく書かれています。本書をぜひ読んでたくましく生きた中世の人びとの暮らしにふれてみてください。

一九九七年三月

館長　市川　健夫

目次

はじめに 3
目次 4
口絵 6
善光寺の年表―古代から近世まで― 8

テーマ1 中世の人びとの祈り …… 9
中世という時代 10
中世の善光寺信仰 12
善光寺の位置と規模 14
善光寺仏の特徴 18
善光寺の伽藍 22
善光寺如来縁起で語られた善光寺 26
古代の善光寺の姿をさぐる 30

テーマ2

善光寺の門前で生きる人びと……31

♧善光寺門前の復原 32
仏画の世界 34
棚店 38
在家 42
仏師屋 46
寺庵 50
南大門 54
♤善光寺門前の発掘調査の成果 58

テーマ3

善光寺をとりまく風景……59

♧石造物の造立 60
一遍上人の絵巻と信濃 62
合戦と屏風絵の世界 66
善光寺と飯綱・戸隠修験 70
銭や焼物の流通 74
♤さらわれた善光寺如来 78
協力者のみなさん 79
あとがき・利用案内 80

一遍上人絵伝（清浄光寺・歓喜光寺蔵　国宝　複製）
13世紀末、聖戒作。一遍聖絵ともいう。全12巻。これは一遍上人の善光寺参詣の場面。

善光寺の年表――古代から近世まで――

西暦	元号	出来事
五五二	(欽明天皇十三)	百済国が日本に釈迦像を贈る
八世紀中ごろ		小県郡に信濃国分寺・国分尼寺が建立される
一〇世紀中ごろ		『僧妙達蘇生注記』に善光寺の名がみえる
一一世紀末～一二世紀初		善光寺の由来を記した「扶桑略記」が成立する
一一一四	永久二	京都法勝寺で善光寺別当の従者が騒ぎをおこす
一一七九	治承三	善光寺で火災がある
一一八七	文治三	源頼朝が善光寺再建を命じる（一一九一完成）
一一九二	**建久三**	**源頼朝が征夷大将軍となる**
一二二七	安貞元	このころ善光寺近辺に後庁とよばれる信濃国の役所があった（明月記）
一二三七	嘉禎三	善光寺の五重塔が完成する
一二六八	文永五	善光寺で火災がある
一二七一	文永八	一遍が善光寺に参詣する
一二七四	文永十一	日蓮が佐渡から鎌倉へ帰る途中善光寺を通る
一二八〇	弘安三	一遍が再び善光寺に参詣する
一三一三	正和二	善光寺で火災がある
一三二三	元亨三	善光寺仏師妙海が十一面観音像を造る
一三三八	**暦応元**(延元三)	**足利尊氏が征夷大将軍となる**
一三七〇	応安三(建徳二)	善光寺で火災がある
一四〇〇	応永七	大塔合戦の戦死者を時衆や善光寺の妻戸衆が埋葬する

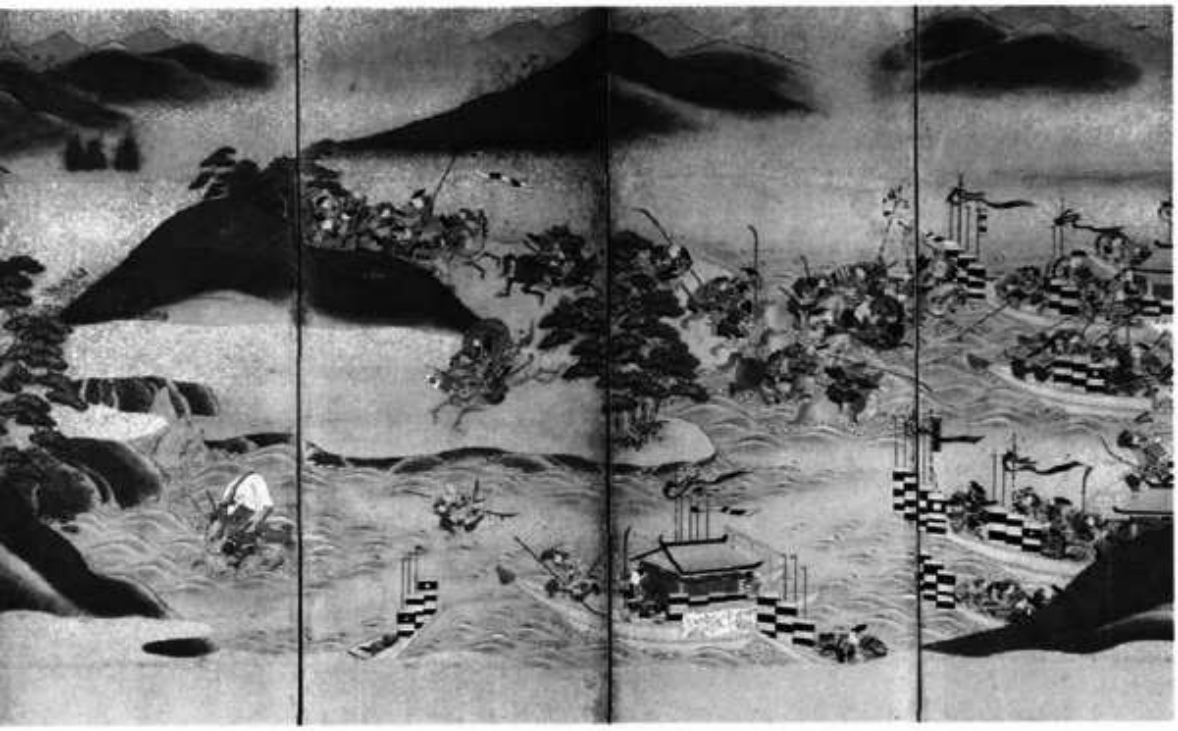
西暦	元号	出来事
一四二七	応永三十四	善光寺で火災がある
一四六七	**応仁元**	**応仁の乱がおこる（～一四七七）**
一四七七	文明九	善光寺金堂が炎上する
一五五三	弘治元	長尾景虎（上杉謙信）と武田晴信（武田信玄）との間で川中島の戦がはじまる
一五五八	永禄元	武田晴信が本尊の善光寺如来を甲府に移す
一五八二	天正十	武田氏が滅亡し、善光寺如来は甲府から美濃へ移され、本能寺の変後、さらに尾張へ移される
一三七〇	正和三	善光寺で火災がある
一五八三	天正十一	徳川家康が、善光寺如来を三河・遠江へ移す
一五九七	慶長二	豊臣秀吉が善光寺如来を京都へ移す
一五九八	慶長三	豊臣秀吉が善光寺如来を信濃へ戻す
一五九九	慶長四	豊臣秀頼が善光寺金堂を再建する
一六〇三	**慶長八**	**徳川家康が征夷大将軍となる**
一六一五	元和元	善光寺で火災があり金堂が焼ける
一六四二	寛永十九	善光寺金堂が炎上する
一六六六	寛文六	新しい善光寺金堂（寛文如来堂）が完成する
一六九二	元禄五	絵入り五巻本『善光寺如来縁起』が出版される
一七〇〇	元禄十三	善光寺町の火事により金堂が焼ける
一七〇七	宝永四	金堂（現在の本堂）が完成する

テーマ1

中世の人びとの祈り

りょうかいまんだら　たいぞうかい
両界曼荼羅（胎蔵界）　仏教の世界観を図化したもの。

中世という時代



◆古代のすがたから中世のすがたへ

中世は、武士に代表される実力による戦いが行われる一方で、人びとが平和な世の中を望み、来世における浄土への生まれ変わりを願うようになった時代です。

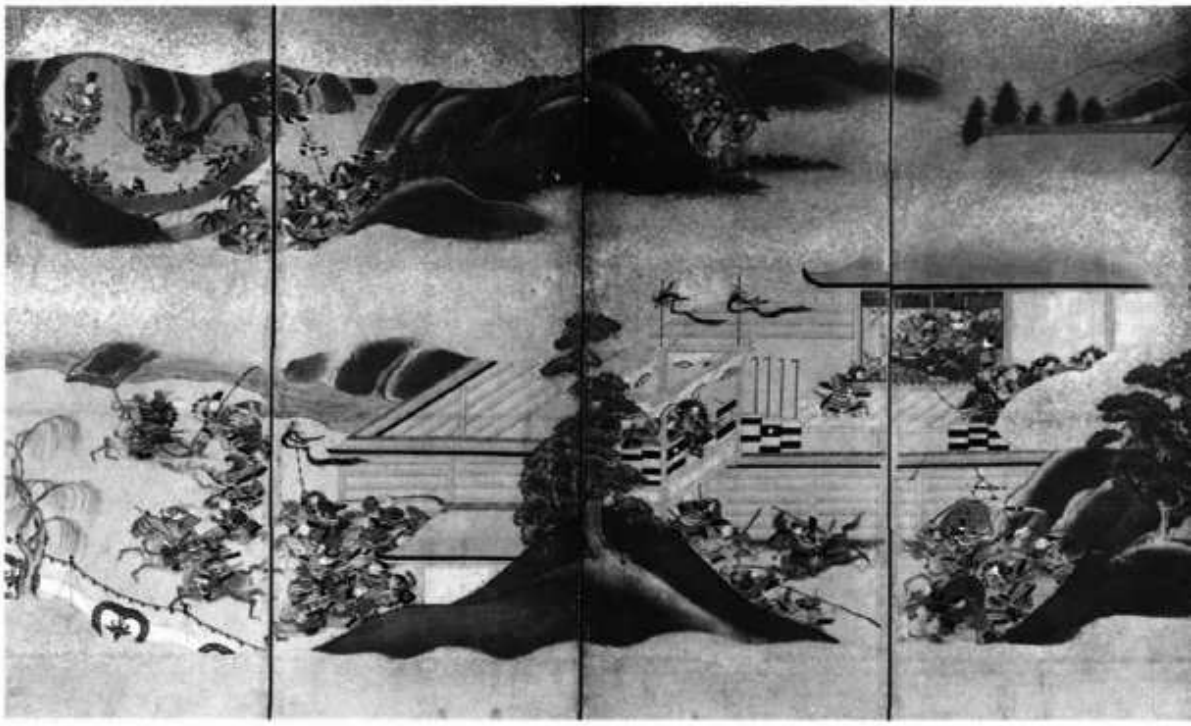
平安時代に戦いを職業として歴史に登場した武士のしごとは、貴族の家来としてその守護にあたるというものでした。鎌倉幕府が成立し、武士が政権を担当するようになっても、生死をかけて戦い、殺生を職業とすることで汚れた身分とみられた武士にとって、心の安穏、すなわち極楽往生への希求は切実なものでした。

一方、中世になると気候が寒冷化し、飢饉や災害、伝染病などに人びとは苦しめられました。また各地で起こった戦いには百姓も動員され、庶民は死と隣り合わせの生活をおくっていたのです。

平安時代の末に末法思想が広がり、浄土思想が盛んになると、貴族に加え、武士や庶民も来世における心の安穏を求めるようになりました。国家や貴族のためにあった古代の仏教は改革を迫られ、武士や庶民を救おうとする教えも数多く登場しました。

◆信濃の中世の特色

信濃は古代から朝廷直轄の牧が発達し、良馬の産地として有名でした。こうした牧は、また騎兵を主体とする武士が成長する絶



源平合戦図屏風（長野県立歴史館蔵）
江戸時代中期の作。八曲一双。紙本著色。源平合戦のようすを描いたもの。

好の舞台でもありました。善光寺・諏訪社は中世にはいると、こうした武士の信仰を集めました。

中世には武神・軍神とされた諏訪社の歴史は、はるか古墳時代にさかのぼります。鎌倉幕府や信濃守護をつとめた北条氏は、信濃に所領を持つ御家人に、諏訪社で行われる武芸を奉納する神事を勤めさせました。やがて各地の御家人は自らの本領に諏訪社の末社をつくり、こうして諏訪社は全国に広まったのです。現在諏訪社の分社は全国に五五九〇社あります。

善光寺は同名のお寺が全国に一三〇か寺ほどあり、善光寺の本尊である善光寺如来を模倣した善光寺式一光三尊像は、中世のものでは全国で二五〇体ほどが知られています。平安時代末からの末法思想の流布とともに、善光寺如来が百済から伝来した仏であり、生き仏であるという信仰が全国に広まり、三尊仏を模造することが流行しました。また、善光寺如来は古代の国家仏教では救いの対象に入らなかった女性をも救済するという信仰も加わり、他の中世寺院にはみられない、さまざまな階層の人びとによって支えられる寺として発展しました。

信濃に本拠をもつ善光寺と諏訪社の信仰が武士や庶民の信仰を背景に、全国にその信仰を広めはじめた時代、それが中世という時代であったといえるでしょう。

（福島正樹）

中世の善光寺信仰

全国最大級の木造建築物・善光寺本堂（長野県教育委員会提供）

◆善光寺信仰の広がり

冬季五輪開催地のひとつ長野市は、善光寺の門前町として発達しました。善光寺は祝祭日はもとより、ウイークデイにも朝から多くの参詣人や観光客が訪れる寺院として、全国的にも有名です。年間の参詣客は六六〇万人（一九九五年）にのぼるといいます。

現在、善光寺を管理・運営するのは、浄土宗の大本願と天台宗の大勧進の二つの寺院ですが、昔から善光寺はどの宗派にも属していないことを特徴としてきました。日本に仏教が伝来した五五二年にいっしょに招来したものが善光寺如来であると信じられ、日本最古の仏像とされてきたのです。

善光寺が全国各地で知られるようになったのは平安時代後半からで、鎌倉時代から室町時代にかけて、関東を中心に善光寺如来を模造することが大流行しました。勧進聖や絵解き法師・琵琶法師などの民間布教者が、善光寺縁起絵などを用いて民間に布教したこともあって、善光寺信仰は全国に広がったのです。

この平安から鎌倉時代、人びとのあいだでは仏教が衰退しその教えが及ばない末法の世界になるという末法思想が、世紀末思想として流布しました。一方で、阿弥陀如来によって浄土の世界に生れかわれるという浄土思想が広がりました。善光寺信仰は、この

T字型の棟をもつ善光寺本堂（長野県教育委員会提供）

阿弥陀信仰や浄土思想にのって、急速に全国に拡大したのです。

しかし、その善光寺や門前町がこの地で平穏無事に発展してきたわけではありません。川中島合戦に代表されるような戦国時代には、高梨氏によって河東に移転させられ、武田信玄は門前の町人らとともに本尊を甲府に移転し、今の甲府善光寺を建てました。上杉謙信も直江津に善光寺町をつくりました。さらに徳川家康が武田氏滅亡後、甲府を支配すると善光寺本尊を浜松に動かし、豊臣秀吉が天下をとると京都方広寺の大仏殿に善光寺如来を移動しました。ようやく慶長三年（一五九八）に秀吉の心変わりから今の地に戻ったのです。

江戸時代になると、荒廃していた本堂（如来堂）をはじめとする諸堂の再建がはかられ、その巨額な建設費用を調達するため、善光寺大勧進は全国各地に前立本尊を出張させ、庶民からの浄財を寄進してもらう出開帳を幕府の承認の下でおこなったのです。元禄十四年（一七〇一）からはじまって五年間におよぶ全国各地での御開帳によって、善光寺信仰が流布するとともに民間から巨額な建設資金が集められました。幕府は地元の松代藩と共同で、奉行人や大工らを定め、近世建築物としては日本で有数の善光寺本堂を建設したのです。宝永四年（一七〇七）庶民の浄財によって現在の善光寺本堂が完成し、弘化の善光寺地震や昭和の松代地震でも崩壊することなく、今に至っているのです。

（井原今朝男）

善光寺の位置と規模

善光寺門前と後庁付近（一遍上人絵伝　複製）

◆中世善光寺の位置と大きさ

鎌倉時代になると、善光寺信仰の流行とともに、善光寺の位置や規模も大きなものになったようです。治承三年（一一七九）に焼失した建物は、文治三年（一一八七）に将軍源頼朝によって再建工事が命じられ、建久二年（一一九一）十月にようやく完成しました。信濃国司の代理人である目代が責任者になり、国内の地頭御家人をはじめ荘園公領の人びとを動員してもなお四年もの歳月を要したといいますから、いかに大規模な伽藍をもっていたかが想像されます。鎌倉時代、善光寺はたびたび火災にあって再建事業が繰りかえされましたが、その場所と規模は鎌倉時代に描かれた『一遍聖絵』・『遊行上人縁起絵伝』や『善光寺縁起絵』などの絵画資料から、その様子をうかがうことができます。

鎌倉時代の善光寺は、現在よりも少し南にありました。裾花川は当時東に向かい、ほぼいまの苅萱堂や七瀬町付近を流れていました。現在の八幡川（堰）がその河道跡です。この付近には「高畠」という地名が中

善光寺の南大門付近（一遍上人絵伝　複製）

世にすでに存在しており、川岸が畑に利用されていました。現在でもその地名が残っています。ここに欄干をもった大橋が架けられ、入り口に木戸が設けられていました。武士といえどもここで下馬することになっており、この木戸こそ善光寺門前の入り口の象徴でした。

南大門は現在の大門町付近にあり、鐘鋳川（堰）がすぐ南側を流れていました。この二つの川に挟まれた場所が善光寺門前で、定期市が立ち、生身の善光寺如来と仏縁を結ぶことのできる境界の場で、だれもが自由に往来できる都市的な場でした。ここは後庁ともよばれ、国の役人らが政務をとる場所でもありました。

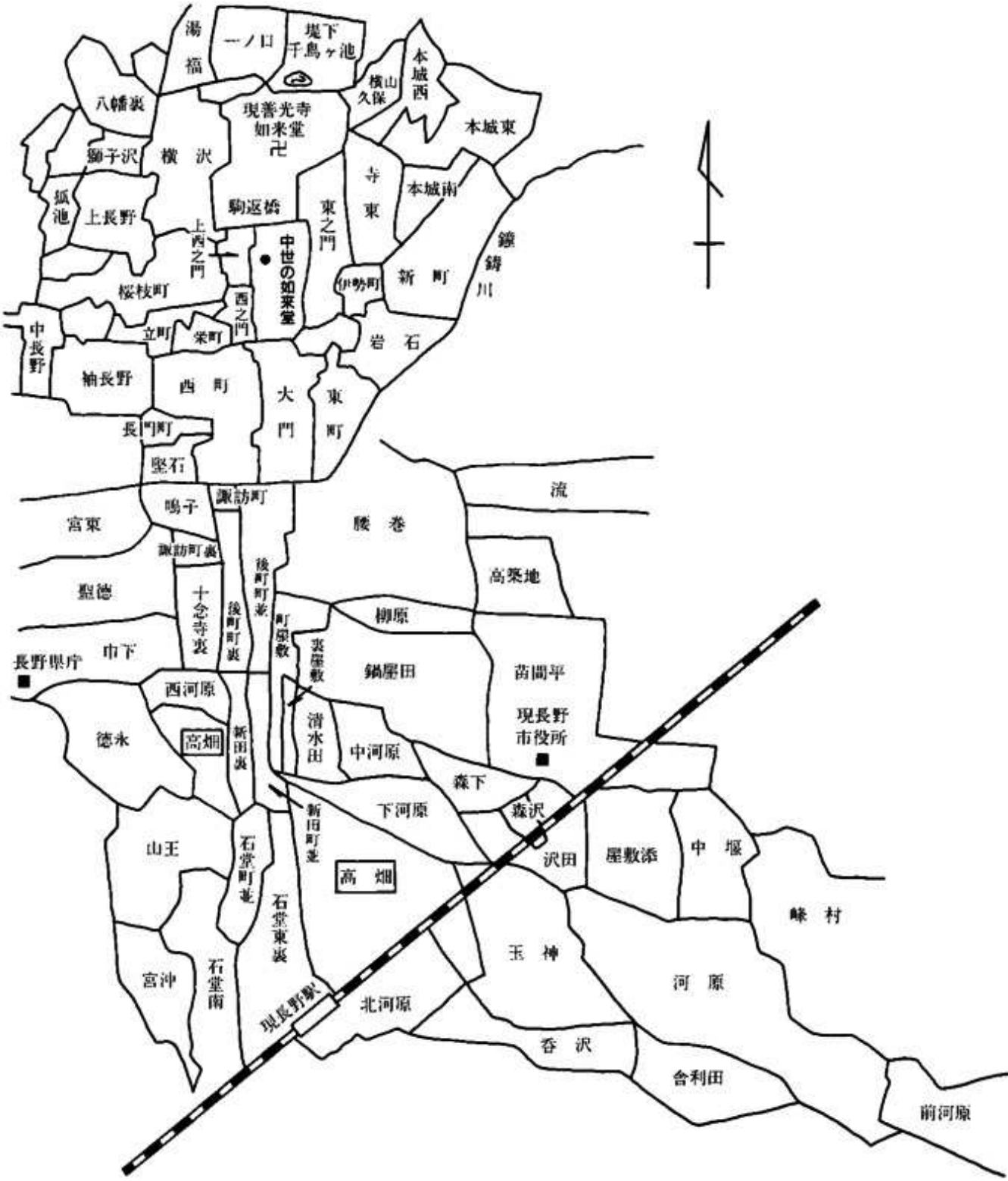
「西門・桜小路」などの地名から地割ができていたことがわかり、鎌倉時代には妙海という仏師や慶運という絵仏師が住んでいました。室町時代には、正一坊という戸隠の山伏や、玉菊・花寿という遊女、さらには大工の仙左衛門父子らが住みついていました。多くの参詣人を相手にした琵琶法師や絵解き法師をはじめとする大道芸人らも集まってとてもにぎやかな場所でした。

南大門を入って中門まで参道がつづき、その両側には町屋敷がありました。現在でも東町・西町の地名が

長野県立歴史館常設展示室
鎌倉時代の善光寺門前のようすを、中世の絵巻などから想定復原した。

残っています。伽藍の中心は、本堂と五重塔と中門・回廊で、本堂は現在の仲見世の中央、地蔵菩薩像付近と考えられます。文永五年（一二六八）の大火のあとに再建された善光寺諸堂塔の記録によると、常行三昧を修する常行堂、法華三昧を修する法華堂がありました。これらは、天台宗を開いた最澄が比叡山にはじめて建設したものですが、浄土教の波及とともに信濃善光寺にも建設されていました。鐘楼とともに五重塔がありました。聖徳太子は善光寺如来と手紙の交換をしたという信仰があり、聖徳太子御影堂が建ち、閻魔王をはじめとする冥界の王をまつる十王堂、諏訪明神をまつった諏訪南宮社などがあったといいます。平安から鎌倉時代にひろまった多くの種類の仏教信仰が善光寺には混在していた様子がこれら諸堂の配置からうかがうことができます。北門をでると、旧湯福川が流れていました。現在の駒返橋と伝承されている場所です。中世善光寺の伽藍は、現在の宿坊と仲見世のある地籍にすっぽりと収まっていたのです。

（井原今朝男）


湯福
一ノ口
堤下
千鳥ヶ池
横山
久保
本城西
本城東
八幡裏
現善光寺
如来堂
獅子沢
横沢
寺東
本城南
狐池
上長野
駒返橋
東之門
上西之門
中世の如来堂
鐘鋳川
伊勢町
新町
桜枝町
西之門
中長野
立町
栄町
岩石
袖長野
西町
大門
東町
長門町
堅石
流
鳴子
諏訪町
宮東
腰巻
諏訪町裏
高築地
後町町並
聖徳
十念寺裏
後町町裏
柳原
町屋敷
裏屋敷
鍋屋田
苗間平
長野県庁
巾下
西河原
現長野
市役所
徳永
高畑
新田裏
清水田
中河原
森下
下河原
森沢
新田町並
山王
石堂町並
高畑
沢田
屋敷添
中堰
石堂東裏
峰村
玉神
宮沖
石堂南
河原
現長野駅
北河原
呑沢
舎利田
前河原

善光寺門前の地籍図

善光寺仏の特徴

善光寺の前立本尊。本尊の秘仏に類似するという。（長野市善光寺）

◆謎の善光寺仏原像

善光寺がいつ出来、本尊仏はどのような仏像であるかということは、だれもがいだく疑問ですが、じつはそれがよく分からないのです。善光寺の本尊は昔から秘仏とされ、それを見ることができません。善光寺仏の原像を探す方法としては、古い文献の調査や、本尊の代わりに七年に一度、御開帳といって公開される前立本尊の特徴から本尊の形を研究する美術史の調査などが行われています。

善光寺についての古い伝承は、「善光寺縁起」にまとめられています。現在その内容がわかる最古のものは、平安時代から鎌倉時代になってからのものです。それらによると、善光寺仏は五五二年に朝鮮半島より伝来したもので、阿弥陀三尊像であったと信じられていました。

しかし、美術史の研究によれば、七世紀初頭の飛鳥時代に朝鮮半島から伝来した仏像の形は、釈迦如来・弥勒菩薩・観音菩薩などの造像が盛んであったけれども、阿弥陀如来や薬師如来などが造られるような環境

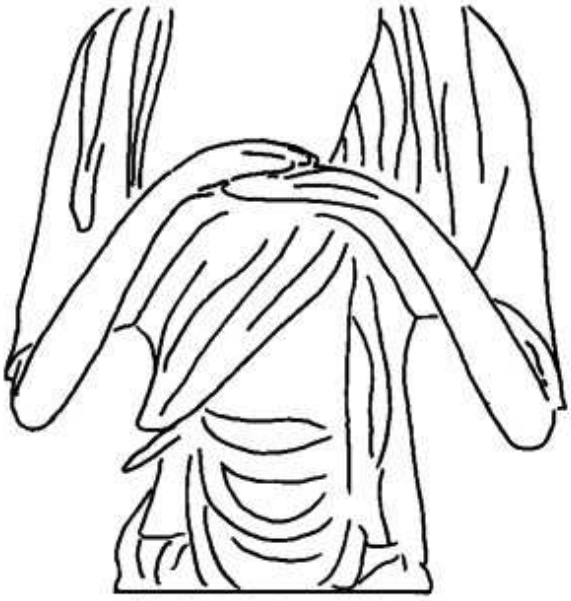
模造された鎌倉時代の善光寺一光三尊仏（上田市願行寺　長野県立歴史館保管）

にはなっていなかったというのです。石田茂作氏が、「善光寺如来は阿弥陀仏に非ず」という論文を発表したのもそのためで、有力な学説となっていました。最近の研究によると、韓国にある仏像は、五七一年に当たる「辛卯」という銘文をもち、善光寺仏と同じ一光三尊像であることが確認されています。六世紀後半には、高句麗に一光三尊仏の信仰がすでにあったというのです。こうして、善光寺仏の原形をめぐる調査研究は、六世紀から七世紀初めにかけて日本が仏教を受け入れるようになったとき、東アジアではどのような仏像が造られ、どのような渡来像が多かったのかをあきらかにする研究とともに進められています。

◆前立本尊の特徴

もう一つの研究は、秘仏の本尊を模造したという前立本尊の形から、善光寺仏の原形を探る調査研究も進められています。

現在、前立本尊の善光寺仏はいずれも鎌倉時代以降になってつくられたもので、全国に二六〇体以上あります。平安から鎌倉時代になると、善光寺信仰が爆発的な流行をみせるようになります。多くの勧進聖とよばれる民間信仰者が夢想にもとづいて前立本尊を模造



掌を上下にあわせる梵筐印

善光寺式刀印

するようになり、金銅仏や鉄仏として善光寺式三尊像を鋳造して、全国各地に善光寺を建立しました。その一部が現在まで伝えられたのですから、当時実際に模造された善光寺仏は、全国で膨大な数量にのぼったと考えられます。それらに共通する特徴は、まず一つの舟型後背をもった一光三尊像の形式をもっています。

中央に位置する中尊の阿弥陀仏は、左手を下にさげ掌を前に向け、第二・三指を伸ばして他の指を折っています。このような印相の仏像はきわめて稀で「善光寺式刀印」と呼んでいます。左右の観音・勢至菩薩像はどちらも両手を胸の前におき、両方の掌を上下に合わせる「梵筐印」という形をしています。しかも三尊像ともに臼の形をした蓮華座にのっているのです。両脇侍がこのような印相をもっている仏像は善光寺三尊像のみなのです。

◇前立本尊から秘仏の原形を探る

こうした共通する特別な形をもつ三尊像を、日本・朝鮮・中国の古い仏像の中にあるかどうか調査研究がすすめられています。現在までのところ、東京国立博物館所蔵の「法隆寺四十八体仏」の中でも一四三号とよばれる一光三尊仏が、善光寺式阿弥陀像ときわめて

韓国の一光三尊像（黒坂周平氏提供）

中国の南梁時代 石造漆金仏坐像（黒坂周平氏提供）

良く類似（ルイジ）しています。中国の上海博物館にある石造漆金仏坐像も一光三尊仏で、中尊は「善光寺式刀印」左脇侍仏は「梵筐印」であるといいます。この仏像には南梁（ナンリョウ）時代の年号である「中大同元年」（五四六年）の銘文があります。韓国で発見された「辛卯」年銘の一光三尊像も、中尊は「善光寺式刀印」を結んでいます。こうした小金銅仏が善光寺仏の祖形ではないかとする学説が提起されています。

こうして最近では、善光寺本尊は、中国の南梁から朝鮮を経て伝えられた渡来仏で、六世紀の仏像様式を備えたものであったらしいという説が有力になっているのです。今後の調査研究が楽しみです。

（井原今朝男）

善光寺の伽藍

鎌倉時代の善光寺模型（長野県立歴史館常設展示）

◆善光寺の伽藍模型

中世の資料をもとに鎌倉時代の善光寺を復原した伽藍（がらん）模型が常設展示室に設置されています。この模型は、国立歴史民俗博物館石井進館長の監修と東京大学工学部建築史研究室藤井恵介助教授の指導によって作成されたものです。

鎌倉時代、治承三年（一一七九）に焼失し、文治三年（一一八七）から建久二年（一一九一）十月にかけてようやく完成した善光寺は、文永五年（一二六七）にまた全焼しました。正安元年（一二九九）に五重塔を含めて再建されましたが、正和二年（一三一三）にまたも本堂などが焼失しました。『応安善光寺縁起』（応永古縁起ともいう）には「文永炎上以後堂塔建立之次第」として、文永五年の大火のあとに再建された善光寺諸堂塔が記録されています。正安元年（一二九九）作の『一遍聖絵（ひじりえ）』（聖戒本）、徳治二年（一三〇七）以前に完成していた『一遍上人絵詞伝（えことばでん）』（宗俊本）、鎌倉時代の『善光寺如来絵伝』として重要文化財に指定されている愛知県安城市の「本証寺本」や東京の

一遍聖絵（清浄光寺・歓喜光寺蔵　国宝　複製）

「根津美術館本」などには、善光寺の諸堂が描かれています。これらの資料を比較検討して二五〇分の一の縮尺で想定復原されたのが、今回の伽藍模型です。

◆本堂（金堂）

「縁起」によれば、鎌倉時代の金堂は東西七間、南北一一間、礼堂が東西六間、南北一七間であったといいます。『善光寺如来絵伝』に描かれた建物は、いずれも本堂と礼堂とがセットになり、棟がT字型になった撞木造で、二階には裳階（高欄ともいう）や正面に向拝がついています。現在の本堂は宝永四年（一七〇七）に再建されたものですが、やはり本堂と礼堂とが結合しており、撞木造で、裳階と向拝がつき、東西一三間（約二三・九メートル）、南北二九間（約五三・七メートル）という巨大な建築物です。絵画資料は省略したり強調したりするため正確な規模を知ることはできません。模型は、横幅一一・六メートル、縦二〇・三メートル、高さ八・四メートルに想定してつくってあります。これら中世の建築物の特徴は、ほぼ現存の本堂と一致しています。

このような撞木造の形式は、全国的には他に例がほとんどなく善光寺の特徴といわれ、建築様式が修験道

南大門の道からみた中世善光寺の景観

と関係が深かったことが指摘されています。

◆舞台

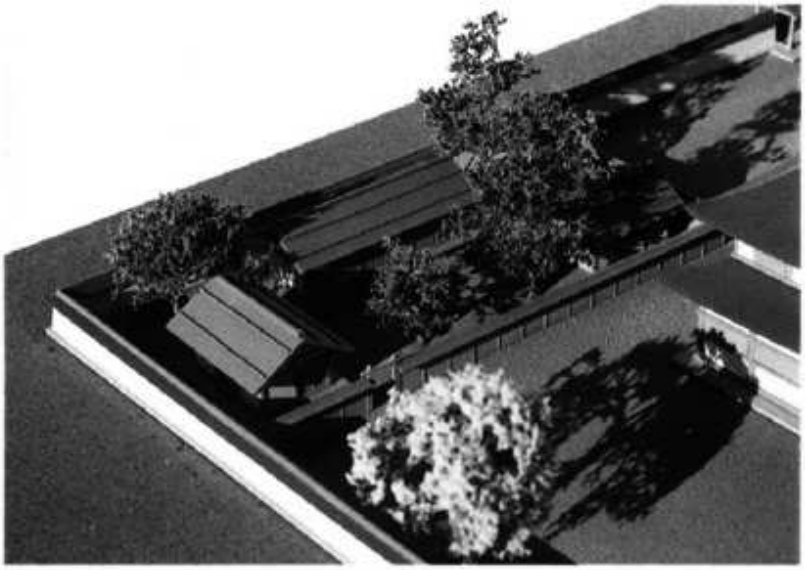
『一遍上人絵詞伝』（宗俊本）は、本堂の前に灯籠（どうろう）と舞台のあったことを伝えています。石の基壇（きだん）で木製の高欄がついています。寺院に舞台が付属するようになるのは東大寺の事例が古いものといわれます。東大寺には今も本堂の前に灯籠がおかれていますが、中世の善光寺は東大寺と類似点が多いようです。

◆五重塔

『一遍聖絵』には、南大門と中門の間に五重塔が描かれています。善光寺如来縁起絵（根津美術館本）も同様ですが、『一遍上人絵伝』のなかには、中門をはいった回廊の中にあったように描いたものもあります。その位置はまちまちですが、中世の善光寺に五重塔がたち象徴的な建物であったことはまちがいありません。模型は、一三四八年の銘のある広島県福山市明王院の国宝五重塔を参考に復原してあります。

◆諏訪南宮社

諏訪明神を信仰する諏訪南宮社が善光寺の中にありました。当時は神仏習合でしたから、神も仏も一緒にまつられていました。兵庫県伽耶院の三坂明神社本殿



中世の本坊

中世の本堂

を参考に想定復原してあります。流造という神社建築の方式によっています。檜皮葺の建物です。

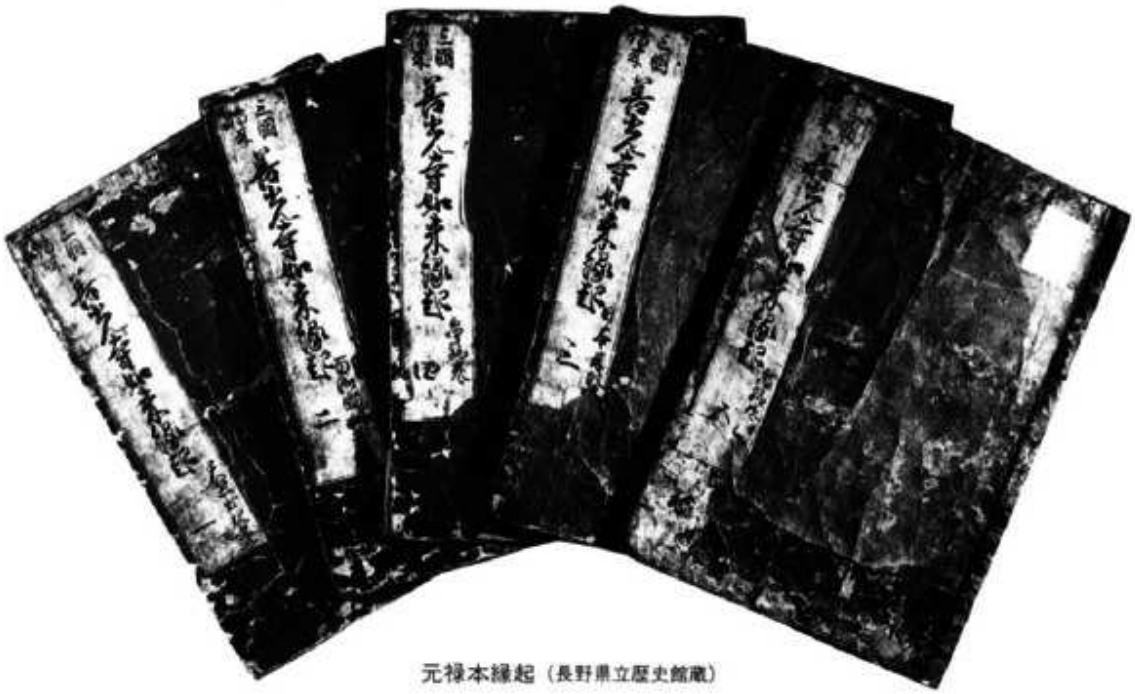
◆**本坊**

『一遍聖絵』や『絵伝』には、南大門を入るとすぐに、カギの手に屈曲した板屋の大きな建物が築地塀によって取り巻かれ、入り口には唐門までつけられています。中世善光寺のもっとも主要な建物のひとつで、善光寺別当の寺務組織がおかれた本坊と想定しました。築地塀につく唐門は奈良県法隆寺西園院の唐門を参考に復原されています。

（井原今朝男）

中世の五重塔

善光寺如来縁起で語られた善光寺



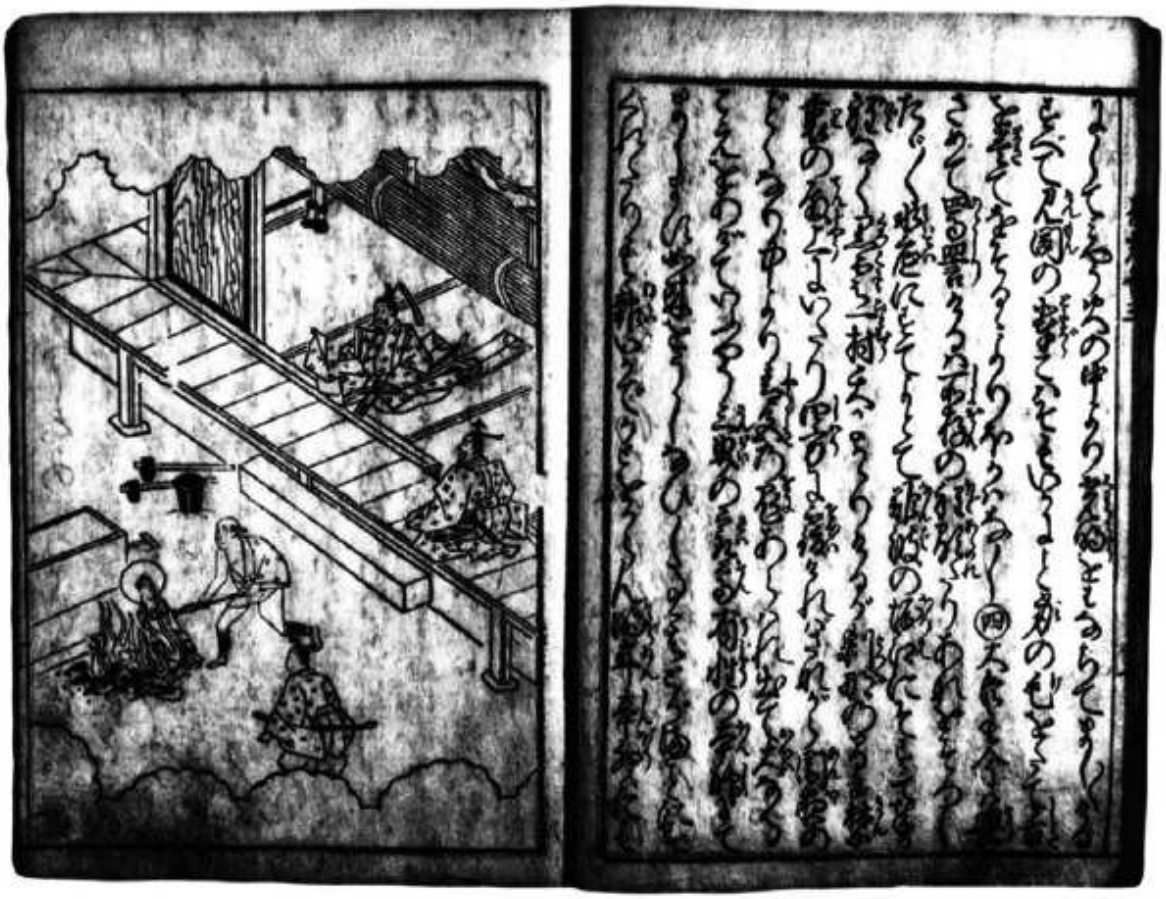
元禄本縁起（長野県立歴史館蔵）

◆善光寺縁起の歴史

信濃善光寺の起こりや由来を伝えているのが善光寺縁起です。古くから信仰を集めている有名な寺社には、たいていこうした縁起があります。内容はかならずしも史実を記したものとはいえませんが、いちがいに伝承を捨て去るわけにもいきません。

善光寺縁起のおこりはたいへん古く、奈良時代にはすでに縁起が語られていたようです。平安時代のものは『扶桑略記』（わが国の歴史を仏教に力点をおいてあらわした書）にも引用されていて、鎌倉時代に編まれた『阿娑縛抄』（天台密教の全般を解説した書）でもこれを採録しています。室町時代には縁起がまとめあげられ、完成したものとして木版で刷られてひろまりました。そのため『御伽草子』のなかでも善光寺の縁起をあつかって紹介しています。

漢字だけで書かれていた室町時代の縁起は、江戸時代には仮名まじりに改められ、挿し絵も加わりました。そのためかなりの勢いで善光寺の由来が人びとに知られるようになりました。善光寺信仰はながい歴史をも



如来さまを火で溶かそうとする物部氏

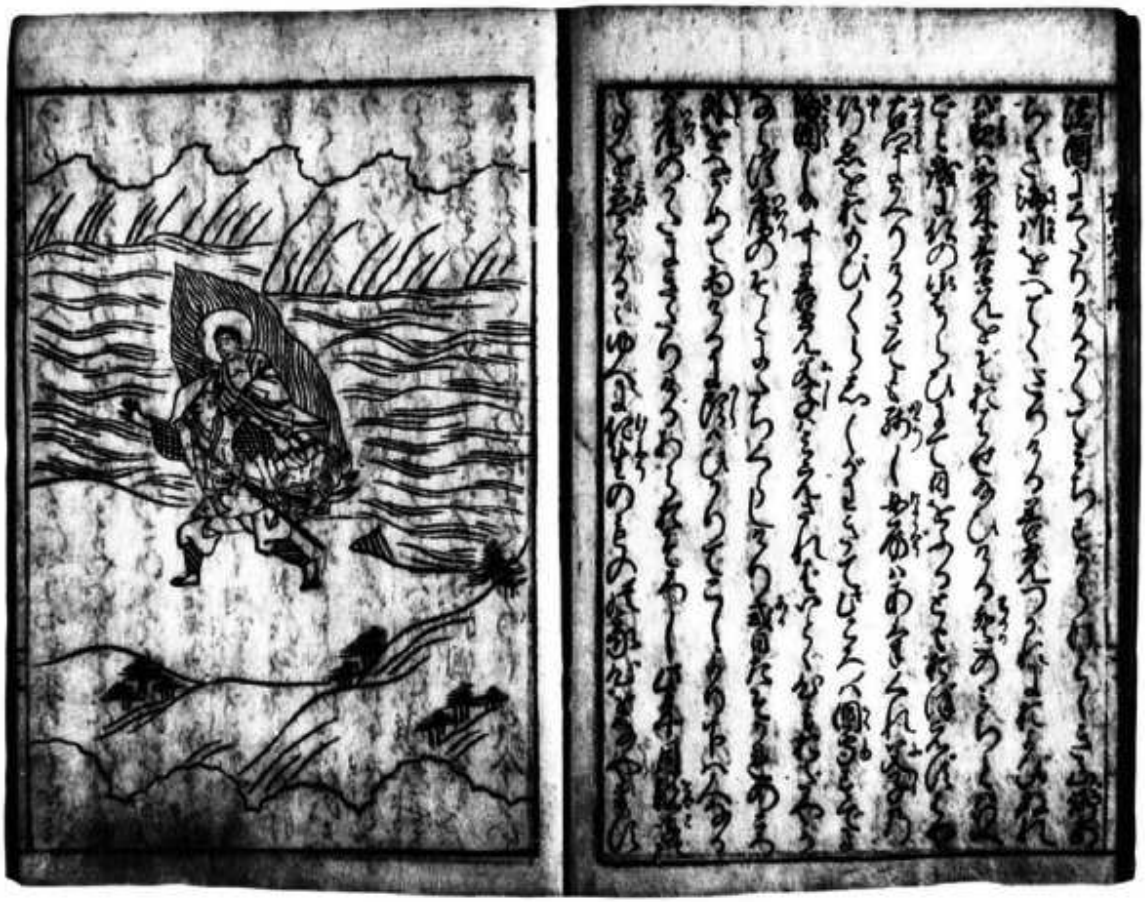
っていますが、縁起のひろまりに支えられながら発展してきたともいえます。

三国伝来の仏さま

それでは元禄五年（一六九二）に京都の本屋さんから出版された『善光寺如来縁起』をもとに、内容の一部を紹介しましょう。この縁起では善光寺のご本尊（阿弥陀如来）は三国伝来の仏さまだと述べています。三国とは、天竺国（インド）・百済国（朝鮮）・日本国をさし、縁起は天竺のお話からはじまります。

天竺国に財宝をたくさん貯えたひとりの長者がいました。待ちわびて生まれた長者の娘が、あるときたいそう重い病にかかりました。それまで財宝にばかり目がくらんでいた長者は、いよいよ阿弥陀如来にすがることにしたのです。すぐには如来さまの助けが得られませんでしたが、長者の心が清らかになったことを見ぬかれた如来さまは、娘の命をお助けになりました。

天竺国でたくさんの人びとを救われた如来さまは、つぎに百済国へ向かわれました。それというのも、あの長者が生まれかわって百済国の王になっていたからです。国王となった長者がいつしかぜいたくをつくした生活をしているのを、如来さまがいさめに行かれた



善光に飛び乗った如来さま

のです。如来さまは長いあいだ百済国におられて、またたくさんの人びとを救われました。あるとき、如来さまは、さらに東の国へ行って人びとを救いたいとお考えになりました。

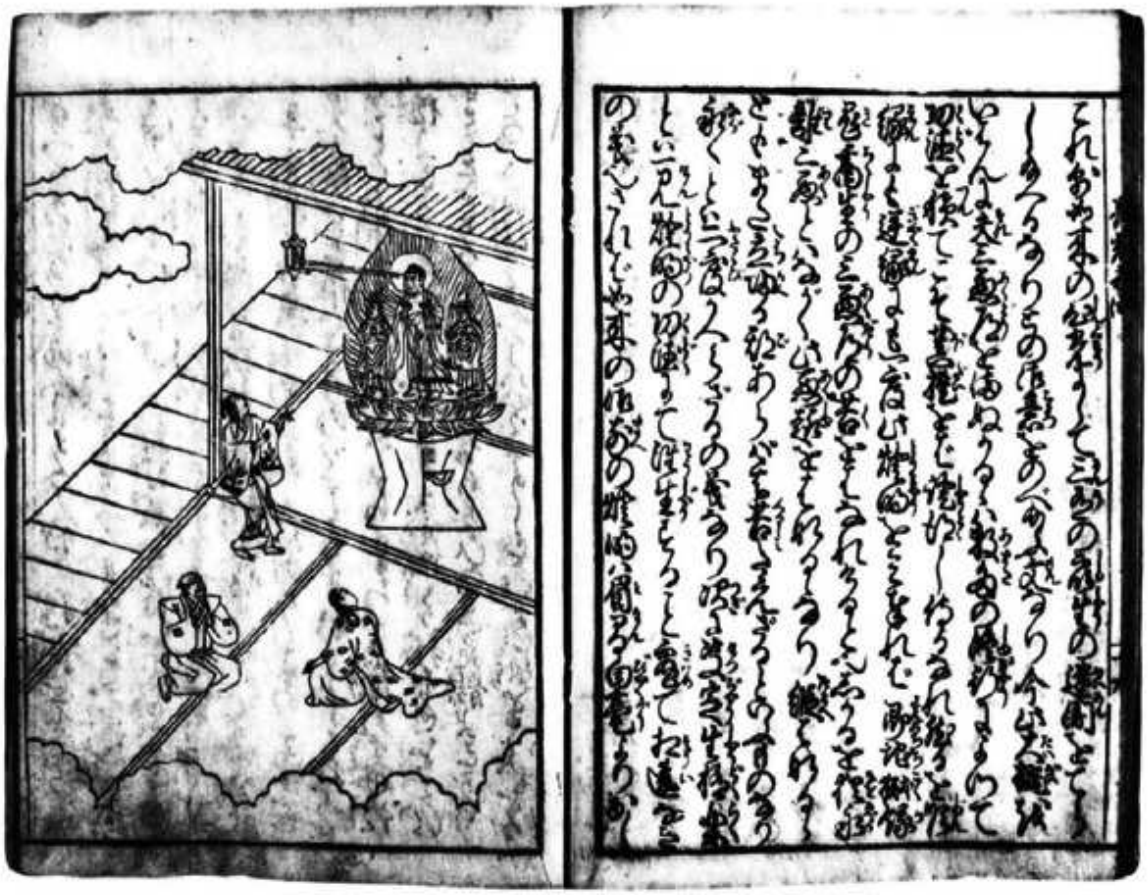
◆阿弥陀如来さまが日本国へ

百済国の王は、供の者をつけて如来さまを船で日本へお送りすることにしました。このとき、如来さまとの別れをなげき悲しんだ百済国の人びとが、念仏をとなえながらつぎつぎと海へ飛び込みました。如来さまを乗せた船ははげしい波をかきわけて進み、日本の難波（現大阪）の湊に到着しました。

如来さまは欽明天皇のもとへ運ばれました。天皇は仏を受け取るかどうかたいそう迷われ、豪族たちに相談しました。蘇我氏は受け入れに賛成しましたが、物部氏は日本には昔からの神様がおいでになるから、という理由で猛反対しました。物部氏は如来さまを金槌でたたいたり火で溶かそうとしましたが、びくともしませんでした。そこでとうとう難波の堀り江にしずめてしまいました。

◆如来さまが信濃国へ

宮中を警固するために信濃国から都へ出てきていた



臼の上に如来さまを安置する

本田善光という人が、都でのつとめを終えて国へ帰るときのことです。難波の堀り江を通りかかると、とつぜん如来さまが善光の背中に飛び乗って、「わたしはずっとここでおまえを待ち続けていたのだ」とおっしゃいました。善光はじつは天竺国の長者の生まれ変わりだということを如来さまから聞かされるのです。如来さまを背負った善光は、夢中で信濃国をめざしました。家にもどった善光は如来さまを安置して、妻の弥生ともども大切にお守りしますが、むすこ善佐の病死など不幸なことに直面します。しかし、やがて家族は如来さまによって救われていくのです。

縁起のお話は善光寺の建立までまだまだ続きます。善光寺の名は善光という人が建てたことからつけられたといいます。このごろ善光寺縁起の全文を紹介した図書がいくつか出版されていますので、それらを読むことによってさらにくわしい内容を知ることができます。JR長野駅前に善光の妻弥生に生まれかわったといわれる如是姫の像が建っています。ぜひいちどでかけてみてください。

（樋口和雄）

古代の善光寺の姿をさぐる

◆史料にみえる善光寺

今から一〇〇〇年以上前の一〇世紀、時代でいえば平安時代の中ごろに成立したといわれる書物に「水内郡善光寺」の名がみえます。そこには善光寺についての詳しい記述はないのですが、平安時代も末の一二世紀に成立した『扶桑略記』という書物には、善光寺の由来を説く善光寺縁起が登場してきます。したがってこのころには善光寺は都（京都）にまでその名が知られる寺院となっていたということがわかります。

この平安時代より前の善光寺については、史料からは今のところ確かなことはわかりません。『扶桑略記』などの縁起は、西暦の五五二年に如来が朝鮮半島の百済国から日本に渡ってきて、のちに信濃国水内郡に安置されたと説いていますが、これは如来が渡ってきたとされる時点から六〇〇年以上たった後に書かれたことですから、そのまま歴史上の事実として考えることはできないのです。

◆善光寺の古瓦

史料に登場する前の善光寺のようすを知る手がかりとしては、現在の境内やその周辺から出土している古瓦があります。じつはこれと同じ特徴をもつ瓦が長野市若槻地区の九世紀後半の遺跡からも出土しました。このことからこのころ、すなわち平安時代前半には今の善光寺境内周辺に屋根に瓦を葺いた立派な建物があったことが推定できます。

さらにこの瓦の文様は、七世紀後半ごろに、当時の政治の中心地であった飛鳥地方（奈良盆地南部）をはじめ各地の寺院でもちいられた瓦の文様に近いといわれています。善光寺の境内から出土している古瓦がそのコピーであったとすれば、九世紀後半からさらに二〇〇年ほど前の七世紀後半の時期に、瓦葺きの寺院があったと考えることもできるのです。

◆古代の寺院と豪族

長野県内では北安曇郡松川村や長野市に、七世紀ごろに造られた古い菩薩像が伝わっています。東筑摩郡明科町や飯田市などには、七世紀後半ごろと考えられる寺院の瓦が出土する遺跡があります。このように、七世紀ごろにシナノの各地で仏教が受け入れられていたとすれば、このころに善光寺にあたる寺院があった可能性も高いといえるでしょう。

また、全国的にみてこの時期の地方の寺院はその地域の有力な豪族が建立したものが多かったと考えられています。『扶桑略記』にも書かれているように、善光寺は水内郡にある寺院です。したがってそのはじまりもおそらく、古くから水内の地域で力を持ち、のちに郡司（郡の役人）として水内郡を治めたような豪族と深いつながりのある寺院であったと考えられるのです。

（傳田伊史）

善光寺境内から出土した古瓦
（長野市立博物館・善光寺事務局蔵）

テーマ2

善光寺の門前で生きる人びと

両界曼荼羅（金剛界）　仏教の世界観を図化したもの。

善光寺門前の復原

復原された善光寺門前

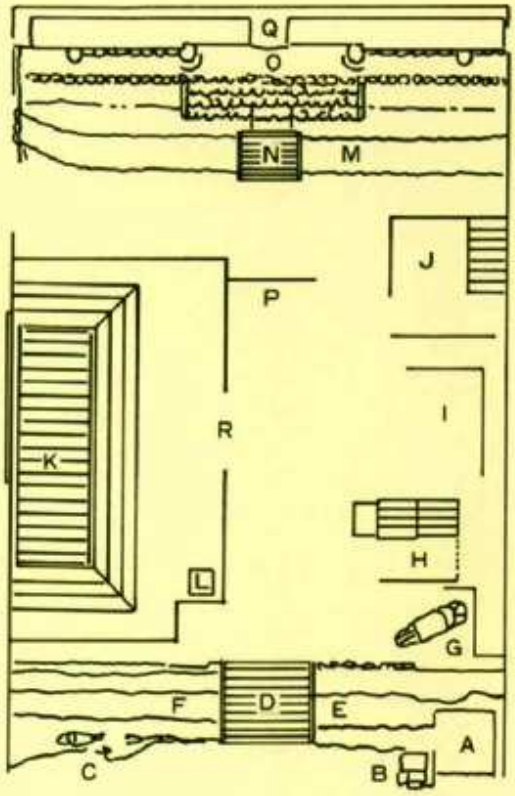
◆都市としての善光寺門前

善光寺をはじめ中世の寺社では、仏事・神事・祭礼に合わせて門前に市が立てられ、領主から商人・職人・宗教者・遊芸人などさまざまな人びとが集まりました。そこでは、各地から集まった品物が売買され、神仏の使いと考えられた遊芸人が寺社の縁起を語るなど、さまざまな社会的機能が混在した都市的空間がありました。中世の善光寺門前は、裾花川（現在の八幡川の流路）から南大門前を流れる鐘鋳川までの五〇〇メートルほどの空間です。そこにはさまざまな建物が存在したと考えられますが、長野県立歴史館では、それを絵画資料や文献史料などにもとづいて想定復原し、一〇メートルという限られた展示空間に縮小して配置しました。

◆善光寺門前のようす

裾花川から南大門前の鐘鋳川にかけての門前は中世の都市で、そこは聖と俗、現世と来世が入り交じる宗教的空間でもありました。また中世の人びとにとって、漆黒の闇となる夜は鬼や悪霊が現れる時間であり、日没直前の時間帯である大禍時はそうした災いがおこる時間への入口でした。

いちばん手前の裾花川の脇には墓碑や供養碑である板碑・卒塔婆がたっています。『一遍聖絵』の善光寺の南大門脇にも卒塔婆



A 善光寺伽藍模型
B マルチメディア「古代中世の信濃」
C 板碑・卒塔婆
D 橋
E 中世の福花川
F 地獄絵
G 馬
H 棚店
I 町屋在家
J 仏師屋
K 寺庵
L 五輪塔
M 中世の鐘鋳川（堰）
N 橋
O 南大門
P 二十五菩薩来迎図
Q 善光寺如来縁起
R 柴垣と門木・勧請つり

門前の建物の配置

があります。川をのぞくと地獄絵が浮かび上がり、そこから南大門の方に目をやると『二十五菩薩来迎図』が浮かびあがります。これらは、門前が現世と来世が入り交じる境界の場であることを演出したものです。

橋を渡ると木戸があります。『一遍聖絵』の鎌倉を描いた場面には鎌倉への入口に閂のついた木戸があり、都市的空間と外の世界を区切っていたことがわかります。木戸には木曽馬をモデルに復原された馬が繋がれています。馬のとなりは、常設の商店である棚店です。『一遍聖絵』の鎌倉や近江の大津、太宰府の場面などに描かれた棚店を参考にしました。その隣は定期市が開かれる町屋在家です。『一遍聖絵』には備前福岡市の場面や佐久の伴野市の場面が描かれています。

町屋在家の奥には仏像を造る仏師の作業場を兼ねた住居である仏師屋を置きました。仏師の作業場を知る資料には埼玉県川越市喜多院所蔵の『職人尽絵』がありますが、そこには臨時の作業場が描かれているだけです。そこで、『年中行事絵巻』などに見られる京都の建物を参考にしました。反対側には僧侶の住まいである寺庵を配置しました。耳を澄ますと、時おり念仏踊りの音が聞こえてきます。人びとは善光寺の境内でおこなわれている踊り念仏にでも出かけたのでしょう。

（福島正樹）

仏画の世界

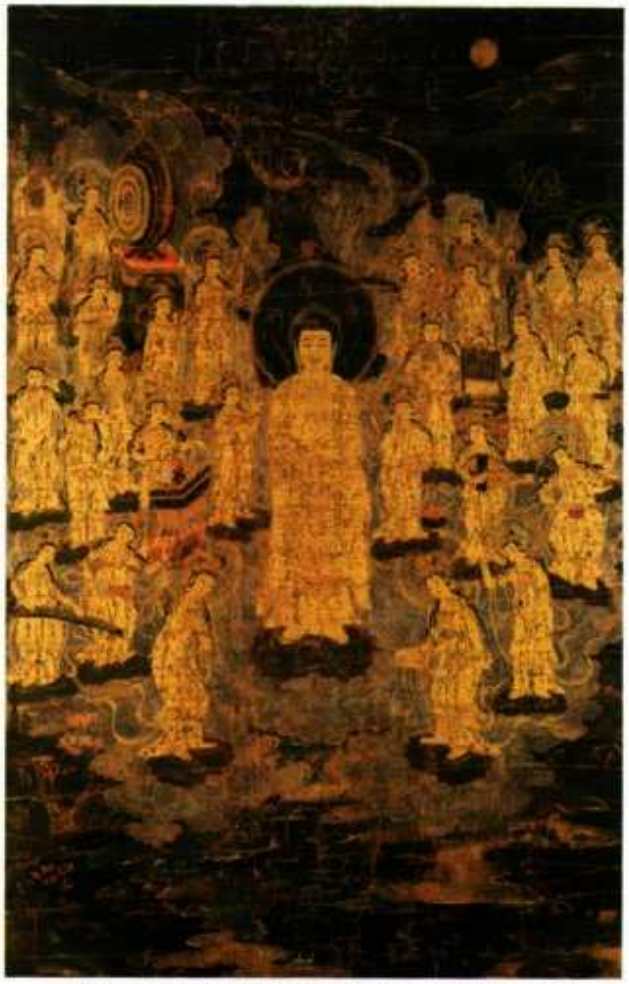
長野県立歴史館常設展示室　鎌倉時代の善光寺門前

◆さまざまなほとけさまの絵

みなさんは、お寺や神社などでほとけさまの絵や彫刻が置かれているのを見たことがありませんか。普通、本物の神様やほとけさまは、私たちにはみることができません。そのため、寺院などでは木や石、金属などで像を造ったり、絵に描いたりして神仏のありがたさを広めようとしました。仏教でも、いろいろな教えに基づいてたくさんのほとけさまが知られています。

ほとけさまは一般の人間とは違う力を持っていますから、造った像もそうした力が感じられるものにしようと、さまざまな工夫がされています。例えば、顔や目、手がたくさんあったり、体が金色に輝いていたり、風もないのに体や髪や衣がふわふわと動いているようにするのです。こうした不思議な力をもったほとけの姿を表すのには絵がいちばん便利でした。

絵に描いたほとけさまは仏画（ぶつが）とよばれています。では歴史館の鎌倉時代の善光寺門前展示には、どのような仏画がかけられているでしょうか。ちょっとのぞいてみることにしましょう。



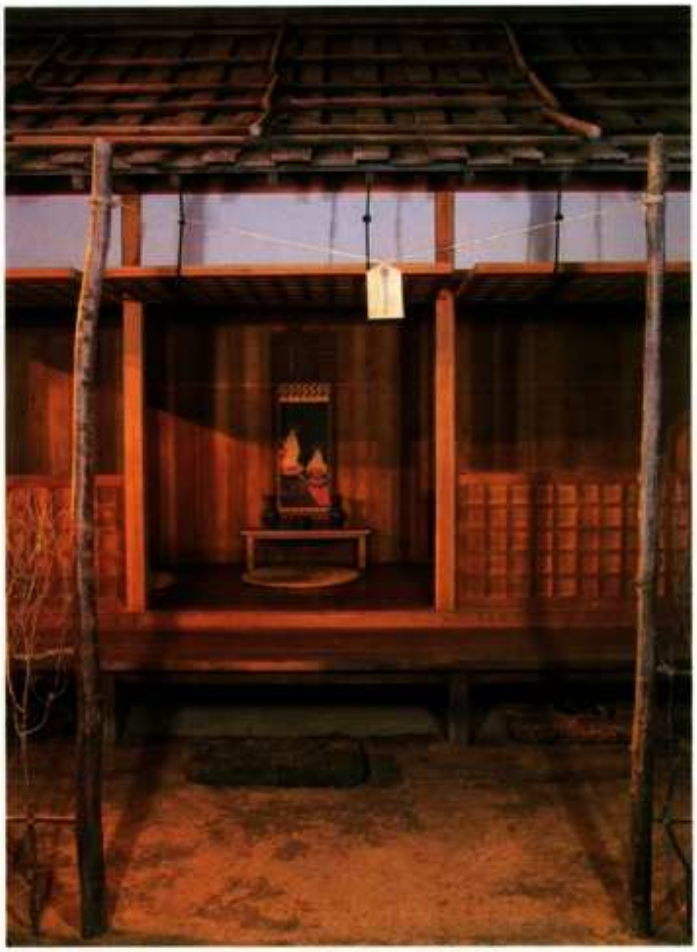
阿弥陀三尊二十五菩薩来迎図（善光寺大本願蔵　複製）

◆天上からのお迎え～来迎図

歴史館の鎌倉時代の善光寺門前を訪れると、まず、門前の入り口、裾花川の橋から上を見あげたところに時どきふわっと浮かび上がるたくさんのほとけさまに気がつくでしょう。真ん中にひときわ大きなほとけさまがいて、こちらを向いています。その周りに綺麗な冠をつけ、それぞれ楽器などを手にもったたくさんのお付きのほとけさまがいます。よくみるとみんな雲にのって空から降りてきていることがわかります。これは善光寺大本願に伝わる『阿弥陀三尊二十五菩薩来迎図』を写したものです。この絵は阿弥陀さまがいつものお供のほかに二五人の菩薩さまをも連れて、亡くなる人を極楽浄土から迎えにきているところを描いたものです。

阿弥陀さまを信じて「ナムアミダブツ」と唱えれば、生れかわったときに極楽浄土に行けるという考えが、平安時代からひろまりました。逆に悪いことをしたり、阿弥陀さまを信じないと生まれかわったときに地獄へ落ちるともいわれました。そのため、阿弥陀さま自らが、たくさんのお供を率いてお迎えに来てくれるという図は、大変ありがたいものとして貴ばれたのです。

二河白道図（萬福寺蔵　重要文化財　複製）



長野県立歴史館常設展示室　寺庵入り口

◆寺庵にかけられた二河白道図

裾花川を渡り、お侍の馬がつながれている木戸を通って奥へ進むと、左手に寺庵とよばれるお坊さんの住まいがあります。留守のようですが、靴を脱いで家にあがらせてもらいましょう。

なかには、金色の体をした二人のほとけさまの絵が掛けられています。向かって左のほとけさまは立って自分の足元に目をやっています。座っている仏さまも、やはり下方をのぞいています。絵の右下からは立っているほとけさまの足元に向かって白い直線が延びています。またその線の左右には青い水の河と赤い火の河が広がっています。これは、島根県益田市萬福寺の『二河白道図』という仏画を写したものです。左側に立つのは阿弥陀さま、右側に座っているのはお釈迦さまです。この絵は、人が阿弥陀さまのいる向こう岸、つまり極楽浄土へいこうとするとき、欲深い心をあらわす水の河や怒ったり憎んだりする心をあらわす火の河に落ちることなく、お釈迦さまの勧め、阿弥陀さまの招きに応じて清い心で真ん中の真白な道を進めば、河を渡って極楽浄土にいくことができると説いています。一遍上人は善光寺を訪れて最初の悟りを開いたとき、この

善光寺縁起絵（根津美術館蔵　重要文化財　複製）

善光寺の外を歩く絵解きの僧（一遍聖絵　国宝　複製）

像に出会い、これを本尊として祈る日々を過ごしました。そのため、時宗にとっては仏画のなかでも特別なものになっています。

◆善光寺のほとけさまを描いた善光寺縁起絵

ふたたび、寺庵から外へ出ると朱色の善光寺南大門の間に大きくほとけさまの絵が浮かんでいるのがみえます。これは東京都港区根津美術館の『善光寺縁起絵』に描かれた善光寺のご本尊の写しです。

善光寺のはじまりのお話は、善光寺の信仰を広めるために絵にされて全国に広まりました。鎌倉時代、善光寺聖とよばれるお坊さんたちは、全国を旅して、人びとに絵をみせながら、善光寺のほとけさまのありがたさを伝えました。一遍上人の絵巻にはところどころに柄に掛軸をつりさげた傘をかつぐ旅のお坊さんが描かれています。

（伊藤羊子）

棚店

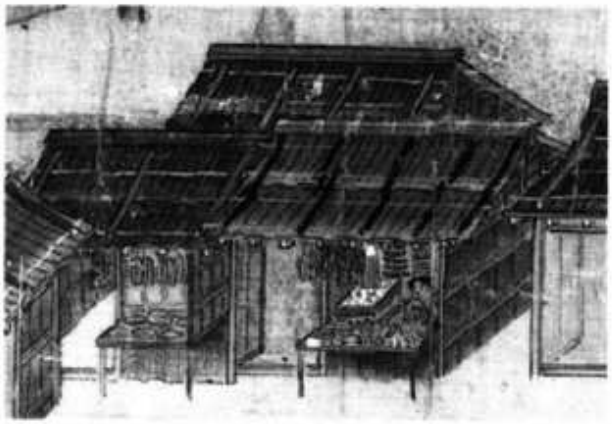
◆門前の商店

棚店は、品物を毎日ならべて売っている商店です。都（京都）では平安時代末ごろにすでにみられたようですが、鎌倉時代以降は、各地の有名なお寺や神社の門前、大きな津（湊）など人が多く集まる場所で商売をしていました。善光寺も鎌倉時代にはますます有名になり、たくさんの人びとでにぎわう場所となったので、門前には、そうした人びと目当てに棚店がいろいろな商品をならべていたことでしょう。

現在の善光寺仲見世の商店は、品物を売る店の奥が住居になっているところが多いようですが、当時の善光寺門前は夜になると木戸が閉められてしまうので、棚店では、朝、品物を持ってきて店を開け、夕方にまた店を閉めて品物を持ち帰ります。中世のいろいろな絵巻に描かれたようすをみると、このように品物を運んだり、棚店で売ったりしたのは女の人が多かったようです。

◆建物のつくり

棚店は、人びとが通る参道に面して建てられていま



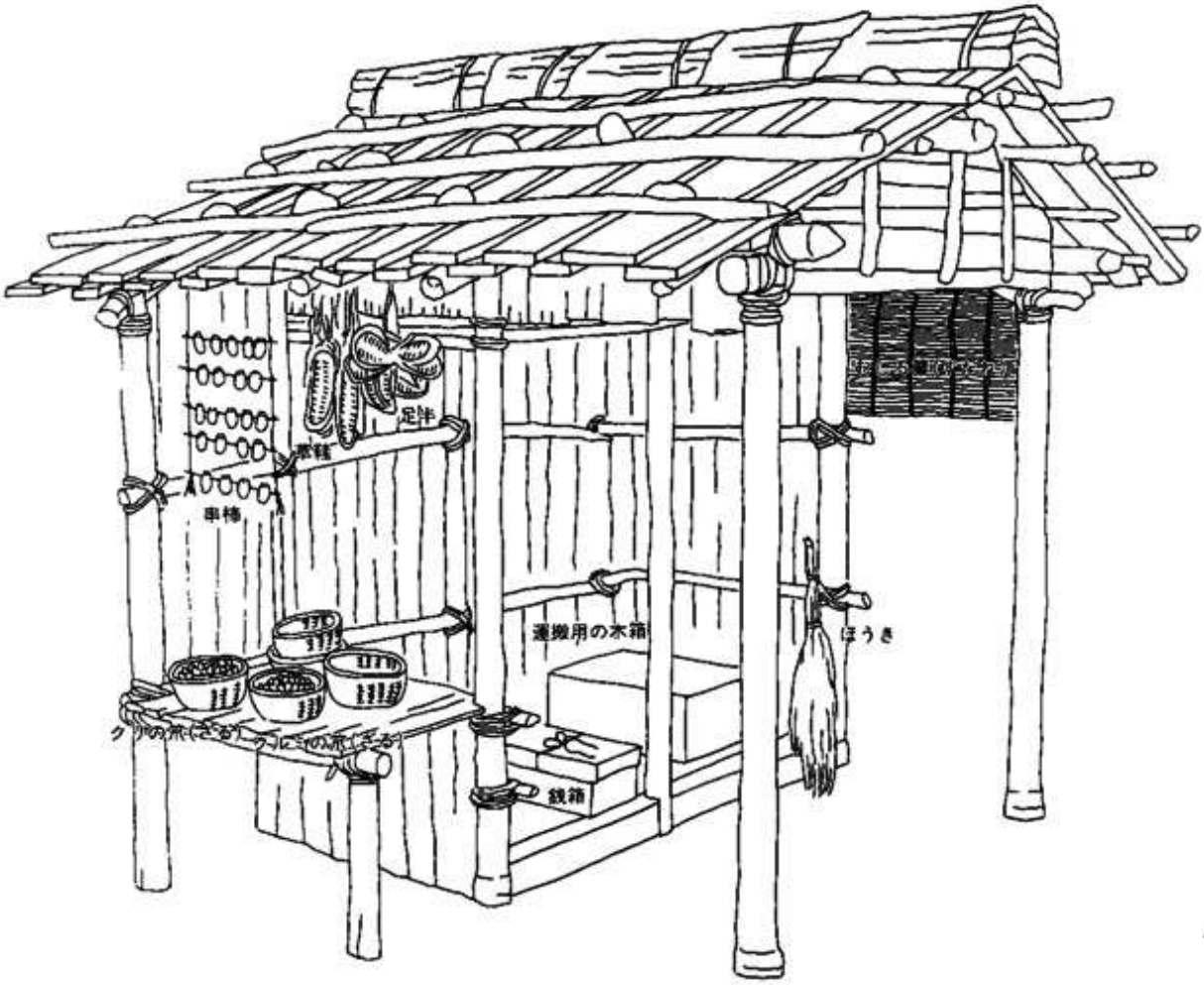
一遍聖絵（清浄光寺・歓喜光寺蔵　国宝）に描かれている鎌倉の棚店

す。建物はほぼ丸太と板からなりたっていて、それらを縄でしばったり、釘で打ち付けたりして組み合わせています。柱は丸太を地面に埋め込んだ掘立柱で、そこに横木をわたし、板を打ち付けて壁にしています。屋根も壁と同じような板を使い、いちばん高いところにある棟木と直角の方向に板を交互に重ね、その上に横木をわたし、押さえに石をおいてあります。

参道に面して棚が張り出し、その横は出入り口になっています。棚の上はしとみ戸といって屋根の梁に向かって建物の内側に開く窓のようになっていて、商売をする時はこれを梁から縄でつるして開けておきます。売り物の品物は参道を通る人びとによく見てもらえるように、棚にならべたり、棚の上にぶらさげます。

建物の内部は、出入り口の奥の側が地面むき出しの土間になっていて、棚の奥にあたる側、つまり売る人がいる場所は板の床になっています。土間の奥は裏口で、茅を編んだむしろがつってあります。

店を閉めるときには売れ残った品物を片づけて、棚の上のしとみ戸をおろして閉め、表の出入り口に戸をたてました。



◇棚店で売られる品物

中世の絵巻をみると、棚店ではさまざまな品物が売られていますが、多く描かれているのは草履・草鞋などのはきものや、魚・果物・野菜などの食べ物です。

はきものは日常生活でも必要なものですが、とくに旅行には必需品となります。善光寺には旅人も多くいたでしょうから、門前の棚店では草鞋と、草履の半分ほどの大きさで足の土踏まずより前の部分だけにつっかける足半というはきものが売られています。

食べ物は、もう夕方で店じまいも近いので、売れ残ったものしかありません。晩秋らしく笊にクリとクルミが入っています。棚の上からは、串に柿を四、五個ずつさして干した串柿がつるされています。干柿は人びとが好む甘い菓子なのです。

奥には、銭を入れるふた付きの箱と、大きな木箱があります。念仏踊りを見に行った棚店の女の人がもうすぐ店じまいにもどってきます。女の人は売れ残った品物、空の笊、銭箱を全部この大きな木箱に入れ、頭にのせて住まいに帰ることでしょう。

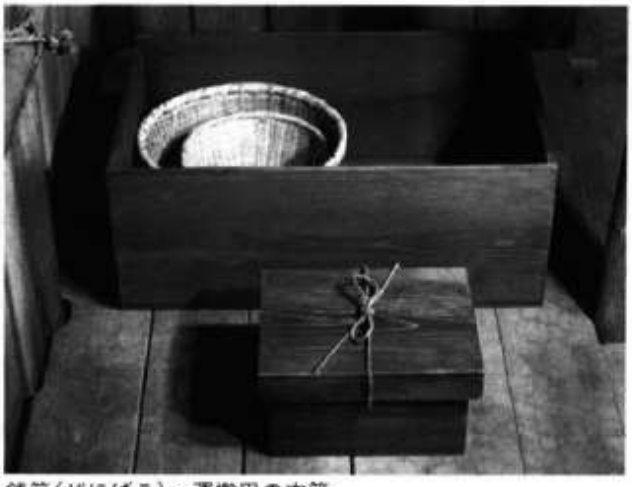
（傳田伊史）

足半（あしなか）
尻切（しりきれ・しきれ）、半物草（はんものくさ）ともいう。当時の人びとの歩き方は、現在の私たちの靴を履いた歩き方とは異っていたと考えられる。

草鞋（わらじ）
切わらを編んだはきもの。二本の緒（お）を左右の乳（ち）に通して足にしばりつける。

串柿（くしがき）
渋柿の皮をむいて、柿を串にさし、天日で乾燥させたもの。

クリとクルミ
ヤマグリやオニグルミは信濃の特産物で、ハレの日の食べものであった。



銭箱（ぜにばこ）・運搬用の木箱
手前は銅銭を入れる木箱。中には数枚の宋銭が入っている。後方はさまざまな品物を運ぶ木箱。

在家

◆門前の市

鎌倉時代には、役所の前、神社や寺院の門前、大きな津（湊）などで、特定の日に市が立ちました。こうした定期市の多くは月に三度開かれたので三斎市とよばれています。市には領主をはじめ、農民、商人、職人、漁師・猟師などさまざまな人びとが集まりました。市で品物が取り引きされるところが町屋在家です。

今日は善光寺で行事がある日です。門前ではこの日にあわせて市が立ちました。

◆在家の建物

在家はもともと市の日に使われるだけなので、たやすく建てたりとりこわしたりできるようなとても素朴なつくりになっています。掘立柱は棚店のものより細いそまつな木材です。東側と北側には板壁がありますが、木材と木材、木材と板の組み合わせには釘は使わず、縄でしばりつけて固定しています。屋根は茅や草で簡単に葺いたものです。品物をおいたり、物売りが座るために、わら束をわら縄で編んだむしろが地面に敷かれています。

備前国福岡市（一遍聖絵　清浄光寺・歓喜光寺蔵　国宝　複製）　市が立った日のようす

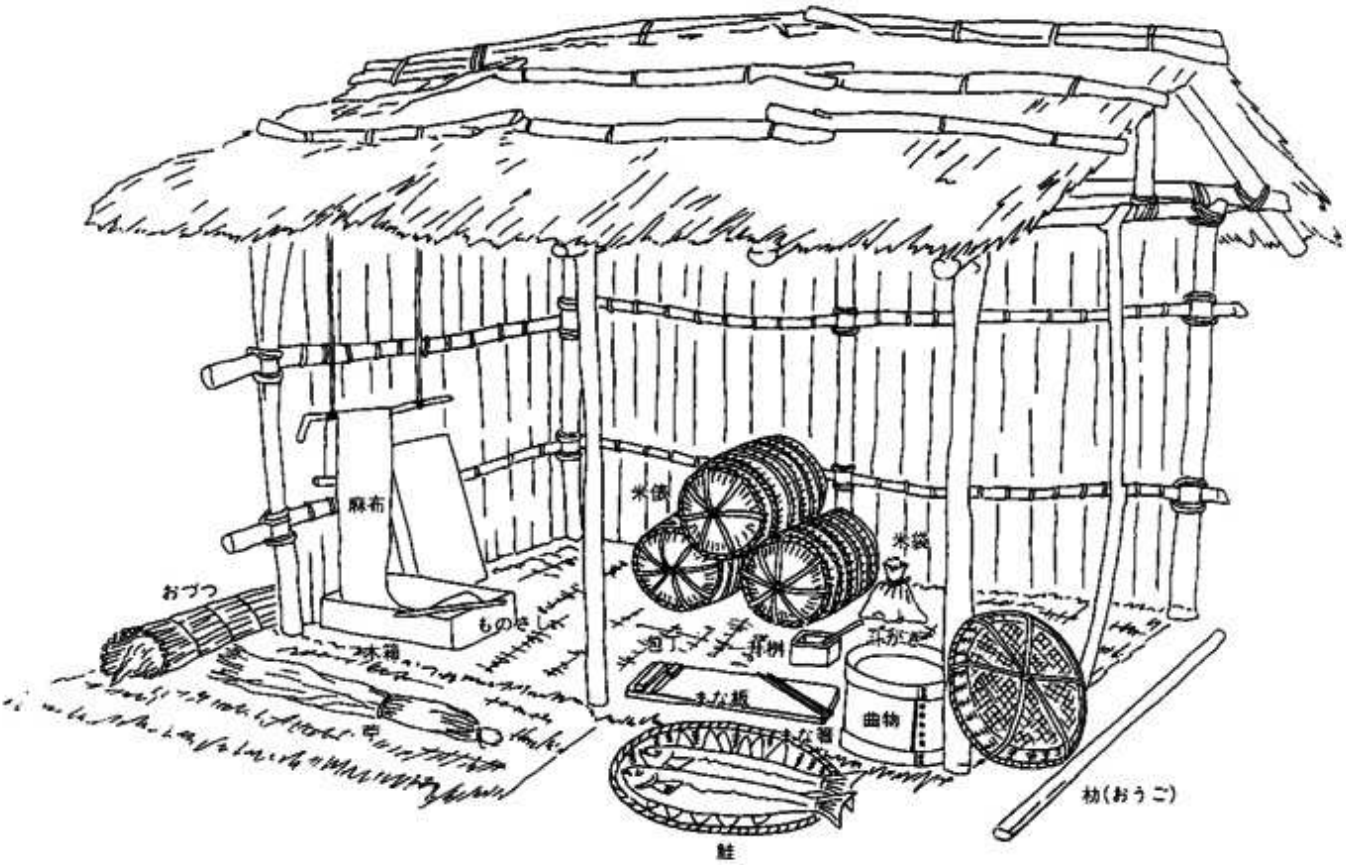
佐久郡伴野市（一遍聖絵　清浄光寺・歓喜光寺　国宝　複製）　市が立たない日のようす

◆市の物売り

市では新米や信濃の特産物などが売られています。

魚売り…卵を抱えた雌の鮭二尾を笹をしいた大きな笊にのせて売っています。今は秋ですから、千曲川や犀川などで獲ったのでしょう。鮭を切り身にする時には、脚のついたまな板にのせ、小刀を包丁として用います。そして柳のまな箸を使って魚には手をふれることなく切り分けます。どうやらここの魚売りは、この技も売り物にしているようです。魚や道具を洗うために曲物に水がくんであります。脇には枌とよばれる長い棒がありますが、魚売りは枌の後のほうに鮭を入れた笊、前のほうにまな板・まな箸・曲物をくくりつけ、かついで市にやってきたのでしょう。

米売り…五斗入りの米俵を三俵積んであるところが米売りの場所です。俵のそばに杉で作った一升桝と斗がきとよばれる小さな丸い棒があります。お米を売る時には、桝でお米をすくい、もりあがった余分なお米を斗がきでかき落として正確な量をはかるのですが、その加減でおまけをしたりします。麻の米袋からむしろにこぼれた黒米（玄米）がみえています。



布売り…魚売りのとなりが布売りです。信濃国の上質な麻布は、「信濃布」とよばれて都のほうでも有名なブランド品です。布売りは麻布を巻いて木箱にいれて市に持ってきたようですが、参道の人に上等な品であることがよくわかるように、布を少し広げて上からつりさげた棒にかけてあります。買う人が求める長さに裁って売るために、翌桧の木で作った一尺のものさしがおいてあります。

苧売り…布売りの前のむしろに白い束がおかれています。ここは苧売りの場所です。苧は高さ一五〇センチほどになるイラクサ科の多年草の植物で、白い束はこの茎の皮からとれるじょうぶで長い繊維（青苧・苧麻）です。この繊維をつないで（麻績み）、撚りをかければ麻糸ができ、それを織れば布ができます。つまり苧売りは、麻布（上布）の素材を売っているのです。かたわらにはもう一束が、蒲の茎を編んだおづつにくるまれておかれています。乾燥させた苧の繊維は、水気に弱いので、苧売りはこのようにして大切な品物を運んできたようです。

（傳田伊史）

まな板・包丁・まな箸・曲物

まな板は神奈川県鎌倉市の諏訪東遺跡で出土したものを、包丁は同じ遺跡で出土した刀子(とうす)を参考にした。

鮭

信濃国では千曲川水系で獲れた。魚肉や卵のほか骨まで食料になった。

一升桝と斗かき

桝は延久元年（1072）に制定された宣旨桝(せんじます)に近いもので、「閑背」(鎌倉時代末ごろ成立）の4寸（約12cm）四方、深さ2寸（約6cm）という記述によった。

米俵と米袋

一俵には米が五斗（約42リットル）入っている、長さが約60cmで、現在みるような俵より小さい。

苧とおづつ

苧は麻糸や麻布の原料。おづつは水につよい蒲の茎を編んだもの。

麻布・ものさし・木箱

ものさしは岩手県平泉町の柳之御所跡出土のものを参考にした（長さ約34cm）。布をはかる尺は、土地などをはかる本尺よりやや長めだったと考えられる。

仏師屋

復原された仏師屋
仏師はここに住み、注文に応じて仏像を製作した。

◆門前に住んでいた仏師妙海

鎌倉時代の末、善光寺の門前に妙海という仏師が住んでいました。仏師とは仏像を造る職人です。彼の造った仏像は県内に九体残っていますが、その台座や胎内には「仏師善光寺住侶僧妙海」といった銘文が書かれています。ここから、彼は善光寺門前に居を構えて仏像を製作したものと考えられます。妙海は、鎌倉時代に寺社の門前に仏師などの職人が住んでいたことがわかる全国的にも貴重な例なのです。

◆仏師屋

仏師屋とは仏師の住居を兼ねた作業場のことです。復原した建物は仏師の作業場と住居がいっしょになったもので、善光寺への参道に面していました。質素な建物ですが、柱は面取りがされており、間口は一間半、奥行き一間あり、ほぞを切って柱を組み、釘を使う大工仕事によって出来上がった建物です。通りに面した壁の部分は、網代編といってヒノキの材から年輪に沿って薄く剝いだ板を組み合わせて編んだものです。復原作業を進めてみると、年輪にそって剝ぐ技術や、

仏師（職人尽絵　埼玉県喜多院蔵）

仏師の作業場を描いた唯一のもの。寺院の境内などに臨時に設けられたもの。槍鉋・手斧・木槌・鑿・道具箱・足台などの道具が描かれている。

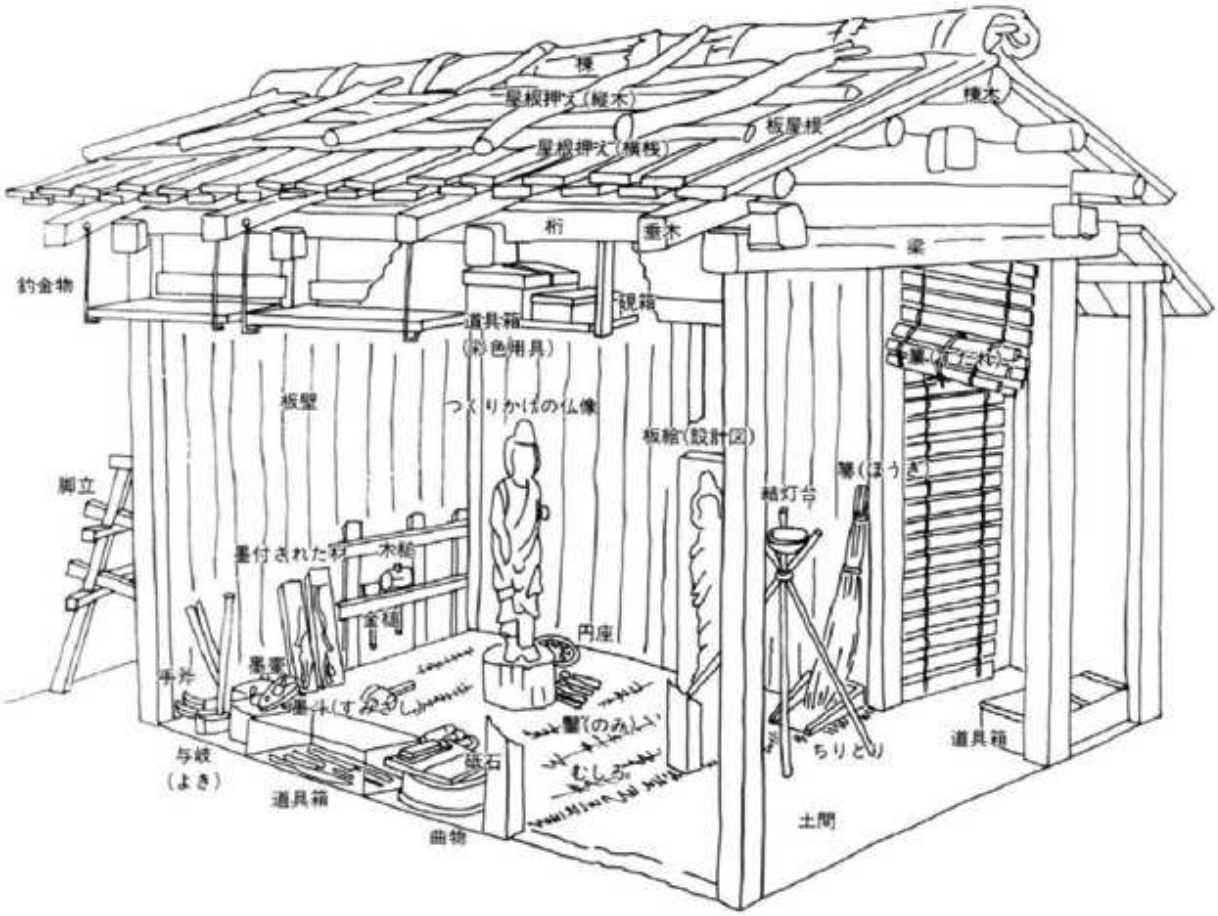
網代を編む技術は消え去ろうとしていることもわかりました。壁の上部には明かりを採る窓があり、外側にあげるようになっています。

中にはいると、正面に木と縄で編んだすだれがかかっています。この奥には仏師が生活する空間がありました。入口の板戸は、はめ込み式になっています。

◆仏師の道具

作業場のまん中には、木の切り株の上にのせられた造りかけの仏像があります。脇に置かれた板には、仏像の完成予想図が描かれています。絵から、頭部に十一の頭をのせた十一面観音であることがわかります。仏像の脇には道具箱が置かれ、その中には道具が納められています。すだれの下のもう一つの道具箱は妙海の弟子のものです。

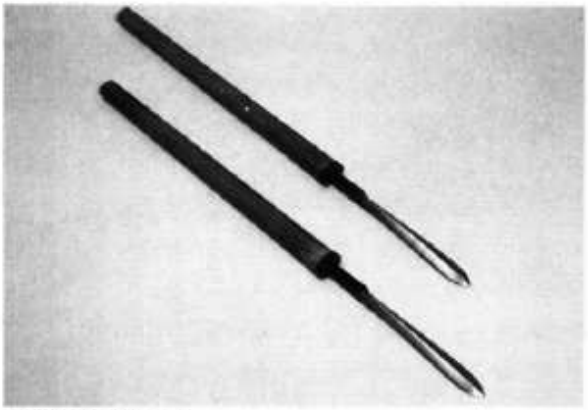
仏師は、まず木を取るために良い日を選んで山に入り、斧などを使って山から伐り出します。伐り出した木から材を取るためには、大鋸という縦挽きの鋸が無い室町時代以前は、楔や箭と呼ばれる鑿に似た道具で木を縦に割りました。それを鋸や手斧を使って荒削りし、仏像を造る材をつくり出します。鎌倉時代ころまでの鋸は横挽き専用で、形も木の葉形をしているもの



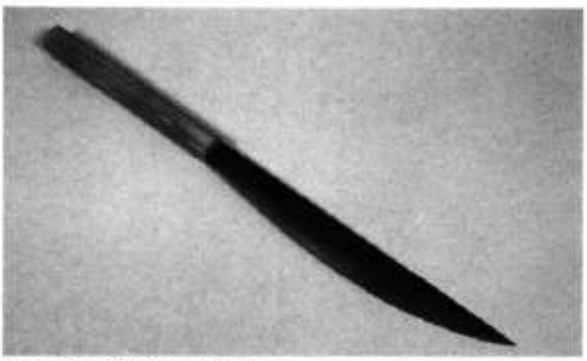
がみつかっています。いよいよ仏像を造る手順に入ります。まず大ざっぱに手斧などで材の面取りをし、その後墨付け、荒取り、内刳り、仕上げ彫りという手順を踏みました。この場面は、墨の入った墨壺と墨斗を使って墨付けを行ったあと、鑿を使って荒取りを行っているところです。よく見ると、ところどころに墨が残っており、壁には墨付けをした材が立てかけてあります。仏師の座っているところには円座が置かれ、左脇には鑿、右には木槌が置かれています。

（福島正樹）

妙海作　木造十一面観音立像
（浜野町上島区所蔵　重要文化財）



槍鉋(やりがんな)
台鉋などのない時代に材の表面の仕上げなどに用いた。興福寺北円堂のものを参考にした。



木の葉状の鋸(のこぎり)
大鋸が登場する以前の鋸は、横挽き専用で、木の葉形をしていた。広島県草戸千軒遺跡などで出土したものを参考にした。

鑿(のみ)
突き鑿・叩き鑿・丸鑿などの種類に分かれ、形も現代のものと大きく異なる。

道具箱
仏師の使う鋸・鑿・槍鉋・曲尺(かねじゃく)などを入れた。

墨壺(すみつぼ)と墨斗(すみさし)
材に墨を付ける道具。東大寺南大門の梁(はり)にあったものなどを参考にした。

箭(や)
材を木目にそって縦に割る道具。両刃で楔(くさび)の役割をする。兵庫県光明寺出土の鑿などを参考にした。

制作中の十一面観音
土間に台を据(す)え、その上に仏像を置いて製作した。

寺庵

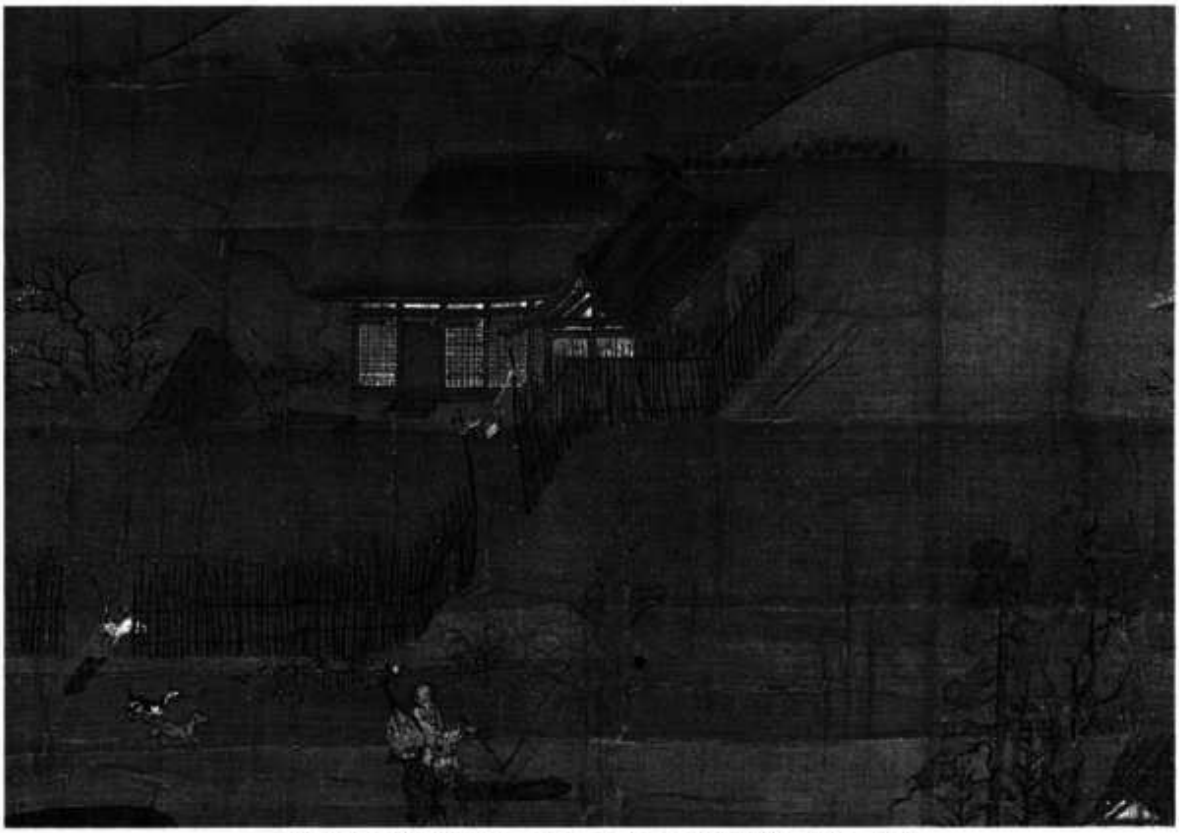
寺庵　板葺切り妻で漆喰壁をもったしっかりした建物で、仏画や机などを並べて写経や読経などをおこなっていた。

◆善光寺門前の寺庵

寺庵とは僧侶の住まいのことです。寺に正規に属した僧侶は寺の敷地にある僧坊で集団生活をおくりましたが、特定の寺に属さず修行や布教を行う半僧半俗の僧侶もいました。ここに復原した寺庵はそうした僧侶が日常的に生活をおくり、旅の僧や山伏などの修行者の宿泊施設でもあった、今でいう宿坊のような役割をした施設です。『一遍聖絵』では善光寺の北側に南を正面にして描かれています。

◆寺庵の建物

周囲を柴垣で囲われた家の入口には門木が立てられ、注連縄が張られています。そこには魔除けの板が吊り下げられています。これらはこの寺庵が独立した屋敷であったことを物語ります。展示空間の制約から、『一遍聖絵』では南に面していた建物を東に面した建物に九〇度回転させました。そのため寺庵に鬼や悪霊が入り込むことを防ぐ「角切り」が南西の角にあるべきところを、復原では東南の角になっています。間口三間、奥行き二間の入母屋造りですが、復原したのは奥行き



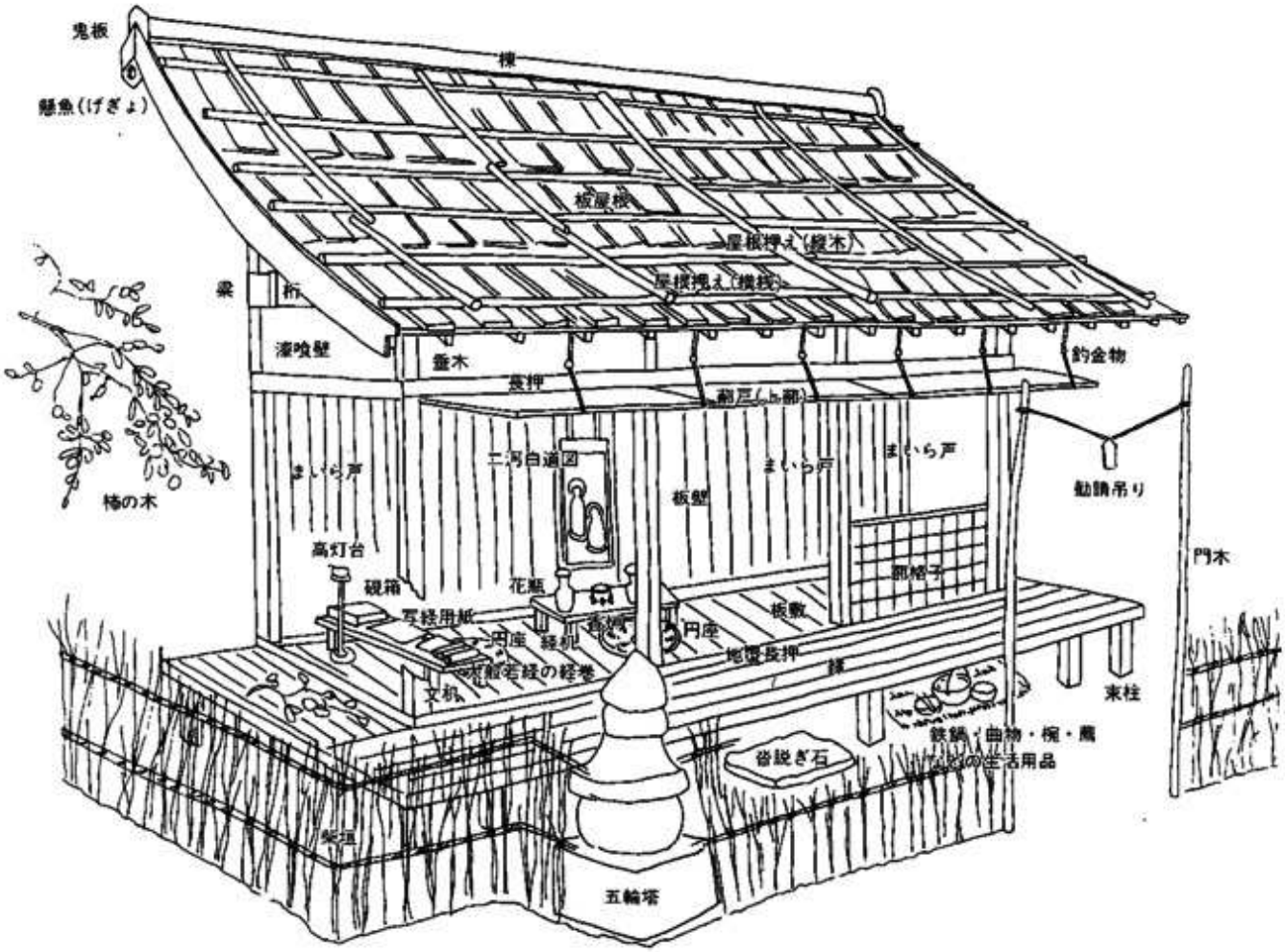
善光寺の北側の寺庵（一遍聖絵　清浄光寺・歓喜光寺蔵　国宝　複製）

一間分で、僧侶が生活をしていた奥行き一間分は省略されています。南側には柿の木の枝が垂れ下がり、濡縁には枝から取られた柿が置かれています。屋敷の木として柿が植えられており、この寺庵が生活する場であったことを示しています。

柱は手斧で削ったあと槍鉋で仕上げ、面取りも行っています。正面には、はね上げ式の蔀戸とはめ込み式の蔀戸が、側面には板戸が付いています。建物の周辺には濡縁がめぐらされ、沓脱ぎ石がすえられ、家の中は板敷きになっているなど、門前の中では最も格が高く高度な建築技術を用いたものです。

◆復原された修行の場

場面は旅の聖や山伏などが勤行しているところです。板敷きの部屋には大きな円座と高灯台が置かれています。一遍は善光寺に参詣したおりに悟りを開いたといわれますが、その時に描いたといわれるのが『二河白道図』です。この図が壁にかかり、その前の経机には読経に際して用いる青磁の香炉と花瓶がのっています。南側には文机があり、机の上には墨・筆・硯などを入れた硯箱が置かれ、かたわらには大般若経の経巻が置かれています。写経用紙の書きかけの経文から、



今まさに大般若経の写経が行われているといった場面であることがわかります。

濡縁の下をのぞくと、簀の上に鉄鍋・曲物・箸が置いてあります。中世には、各地を遍歴する職人や旅の僧、山伏などが御堂や庵に寝泊まりしました。これはそうした人びとの生活道具です。おそらくこの寺庵にもそうした人びとが泊まったことでしょう。

◇垣根と勧請吊り

屋敷に垣や柵をめぐらすことは、屋敷地に対する占有の表示です。これは古代にもありましたが、中世になると百姓の家にも垣根がめぐらされるようになりました。垣根には、材料や作り方によってさまざまな呼び方があります。柴垣は樹木の枝などを集めて立てたり組んだものです。注連縄は聖俗を区切るしるしですが、そこに下げられた板は「勧請吊り」(門守り)で、それは屋敷の中に災いが入るのを防ぐお守りで、そこにはお経の名、神仏の名、あるいは願いの内容、呪符などが書かれていたようです。注連縄に勧請板や木の枝などを下げる習慣は、現在でも村境などで行われる「道切り」の行事などに残っています。

(福島正樹)

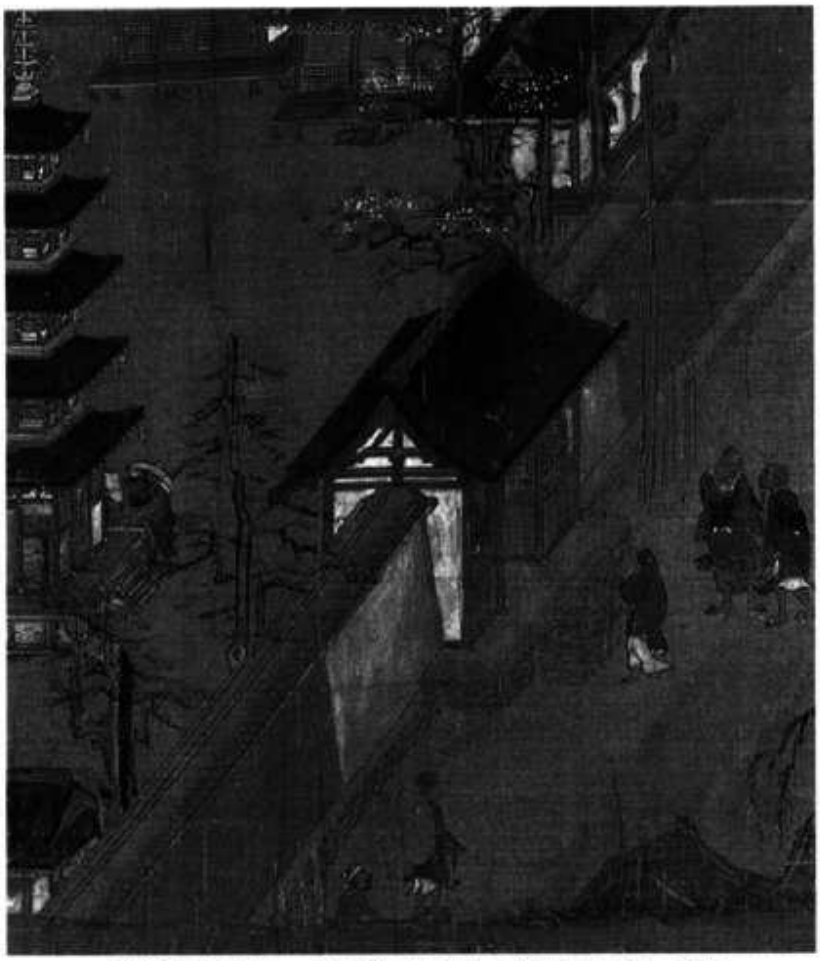
寺庵の内部
文机と写経のための道具。

寺庵の内部
二河白道図と香炉・花瓶をのせた経机。

門木と勧請吊り
屋敷を周辺から区切り、災いの侵入を防いだ。

縁の下の生活道具
遍歴する人びとが生活した。

南大門



善光寺の南大門　一遍聖絵（清浄光寺・歓喜光寺蔵　国宝　複製）

◆南大門のまえ

善光寺門前の参道を進むと、境内の入り口に大きな朱塗りの門があります。左右に、大きく強そうな姿の金剛力士という像が立っています。寺の本尊を守り、参詣人らの悪い心を捨て去り、信心深い気持ちにさせる役割をもつものと考えられています。ここから奥に進むと、本尊の善光寺如来をまつった金堂や回廊などがあります。復原模型では、この箇所に鎌倉時代末期の『善光寺縁起絵』から本尊の姿を大きく表現しています。中世の人びとは、善光寺如来は生身の如来で生きているのだと信じていました。建物よりも仏像を大きく描いているのはそのためです。

◆絵巻に描かれた南大門

『一遍聖絵』（聖戒本）に描かれた南大門は、石垣の基礎の上に築地塀が建てられています。朱塗りの四足門で漆喰壁と檜皮葺の屋根が色彩豊かに描かれています。門柱の側には卒塔婆が三本建てられています。柱の頭部分を五輪塔の形に彫刻したもので、供養塔としてつくられたものです。鎌倉時代の書物である『沙石

善光寺の絵解き法師

善光寺の琵琶法師

善光寺門前で道案内する子ども

抄』によると、娘を亡くした鎌倉の住人がわざわざ極楽往生のために遺骨を善光寺に納骨した説話が記されています。善光寺如来の縁に触れて極楽往生しようと、善光寺の近辺に石や木でつくった墓石や供養塔を建てたのです。南大門の前は、南からの参詣道路と東西からの道が交差する地点となっています。蓑に鹿杖をもった狩人や毛皮鞘をもった武士、袿の女人、綾蘭笠を背負った法師、鉢巻き姿の旅人らが南大門に向かっている様子が描かれています。この場所は、門前でもっともにぎやかな繁華街だったのでしょう。

大門の門前で目を引くのが、裸足の子供です。衣被物を羽織り白絹の鼻緒の草履を履いた高貴な尼僧を道案内しようとしている姿が描かれています。寺社の門前や道路には捨て子や病人が放置されることが多く、幕府もたびたび禁令を発布していますが効果はあまりありませんでした。参詣人からの布施や雑事を手伝って小銭をえて生活する社会的弱者の人びとが住みついていたのです。寺子とか乞食坊主などと呼ばれる人びとが、善光寺如来の御利益を解説する絵解き法師や琵琶法師などとなって民間芸能や民間信仰を流布する役割をはたしていたのです。

復原された善光寺の南大門

◆南大門と門前町

『一遍上人絵伝』（清浄光寺本）に描かれた南大門では、門を入って中門にすすむ参道の両側に長棟の町屋が描かれ、若僧や参詣人、子供たちが一遍の集団を見物しています。これが史実だとすれば、善光寺の南大門の築地塀は東西にのびるだけで、町屋がその中にまで発達していたオープンな構造になっていたことになります。

『善光寺縁起絵』などには、南大門からはじまる築地塀が四方をめぐっているように描いたものもあります。通常は大門から内部の境内ですから、町屋などないのが普通だと思われます。どちらが正しいのか、時代によって都市の構造が変化したのか、今後の調査が楽しみです。

◆地名と発掘

南大門があった場所は、現在、小字名として「大門」という地名が残った場所と考えられます。細長い地割が善光寺にむかって伸びています。この「大門」を過ぎてその左右には「東町」・「西町」という町地名が残っています。ちょうど『一遍上人絵伝』の町屋が描かれた場所に相当することになります。中世には、「桜小

南大門から中門までの間に長棟の町屋が並んでいた
一遍上人絵伝（清浄光寺本　複製）

路」・「西門」などの地名がすでに存在していたことがわかっています。今後も伝承地名や小名などの地名や地割などの調査研究が大切になります。

一九九五年から翌年にかけて「大門」という地籍で発掘調査がなされ、一部室町時代の町屋（まちや）と思われる建物や中世の流通銭などが出土しました。まだわからないことばかりですが、少しずつ歴史を解明する調査や研究がつづけられています。

（井原今朝男）

善光寺門前の発掘調査の成果

中世の善光寺やその門前の様子は不明なことが多いのですが、最近、善光寺周辺でも都市再開発にともなう部分的な発掘調査が行われるようになりました。その結果、貴重な資料が出土し、少しずつ中世の善光寺門前の様子をかいま見ることができるようになってきました。

門前の道路工事では、実に三七〇点もの大量の中世石造物が出土しました。五輪塔が大部分で、しかも四角い地輪部分が二六六個、全体の七割にものぼり、円形部分をもった空風輪や水輪はわずか一一個しかありませんでした。近世の善光寺門前を再建するために、無数にあった中世石塔群のうち、地輪や基壇など四角い石材のみを取り出して建築石材として再利用していたことが分かりました。その中には「応永卅一年（一四二四）八月廿六日　高阿弥陀仏」とか「明応八年（一四九九）八月十三日　□阿」などの文字の書かれているものも発見されています。ほとんどが室町代から戦国時代のものです。彫られた文字を金泥で装飾したものもありました。中世の善光寺は極楽に通ずる供養・鎮魂（ちんこん）の場でもあったのです。

「字大門」地籍からは、宋銭や明銭が散布したかのように二〇〇枚ほど出土しました。建築物の礎石や石列、火葬骨なども出土しました。室町・戦国時代の町屋群が姿を現したのです。階段状に段差がつけられ掘り下げられた場所に平石の礎石群がならんだ遺構が出土しました。明らかに半地下式の礎石建物が存在していました。こうした遺構は、これまで鎌倉（神奈川県鎌倉市）・博多（福岡市）・草戸千軒町（広島県福山市）など中世都市の遺跡で発見されています。中世善光寺の門前がどのような構造になっていたのかを探る手がかりが発掘調査から得られる可能性が広がっています。今後の発掘調査の進展が期待されます。

（井原今朝男）

中世の町家を示す遺構が見つかった善光寺門前町の遺跡群
（長野市教育委員会提供）

テーマ3

善光寺をとりまく風景

善光寺縁起絵（横須賀美術館蔵　重要文化財　復製）

石造物の造立

寺庵内の五輪塔

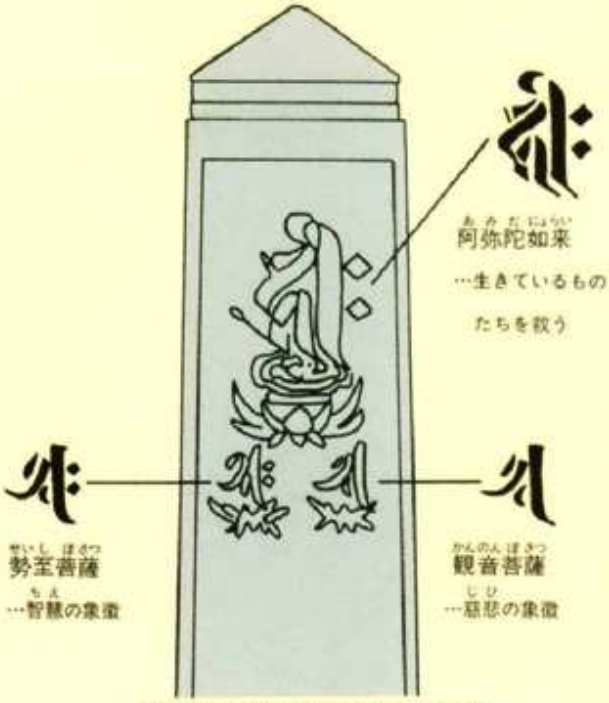
河原にたつ板碑・卒塔婆

◆門前の板碑・卒塔婆・五輪塔

善光寺門前の展示室に入ると、薄暗い裾花川の河原に、石や木で造られた展示物が並んでいます。ここは門前の性格を象徴する葬送の場所です。まず、橋のとなりに建っている石の板からみていきましょう。これは板碑といっておもに関東周辺で鎌倉時代から室町時代にかけて盛んに作られた供養塔です。先端が二等辺三角形をした板状の青石材に、漢字でもひらがなでもない、なんだか難しい文字が大きく三つ刻まれています。不思議な文字は梵字とよばれるインドのサンスクリットという言葉の文字です。真ん中の大きな文字は、浄土のほとけさまである阿弥陀如来をあらわし、その下の二つの文字は阿弥陀さまのお供をする勢至菩薩（向かって左）、観音菩薩（向かって右）です。この碑によって亡くなった人が浄土に生れかわることを願ったようです。青っぽい色をしているのは、緑泥片岩という埼玉県の秩父地方でとれた石材を使っているからなのです。

板碑の横に建つ高い木の棒は卒塔婆といいます。これはもともと仏教のお寺の塔を示す言葉で、仏舎利（お釈迦さまの遺骨）の安置を目的とする建造物でした。古代インドの「ストゥーパ」が中国へ伝わり「卒塔婆」と訳されました。また日本では略されて

お堂のうしろの五輪塔・卒塔婆・宝塔
（一遍聖絵第一巻二段　中央公論社提供）



常設展示室の板碑に刻まれた梵字

塔とも呼ばれています。これには五重塔や五輪塔などいろいろな形のものがあります。卒塔婆や五輪塔は室町時代から戦国時代になると豊かな人びとの間に浸透し、個人的な供養塔やお墓として建てられるようになりました。

◆石造物の建てられた場所

ところで、板碑や卒塔婆はどうして河原に建っているのでしょう。それは、河原が人びとの暮らす町中から離れた境界にあたるからです。当時善光寺へは全国各地からさまざまな人がやってきました。なかには途中で病気になり、亡くなってしまった人もありました。そうした身よりのない人の亡骸や思いを供養するために、日常の暮らしの境目にあたる場所に板碑や卒塔婆などの供養塔を建てたのでした。

（伊藤年子）

一遍上人の絵巻と信濃

一遍上人の善光寺詣（一遍聖絵　清浄光寺・歓喜光寺蔵　国宝　複製）

◆かき写された絵巻

絵巻は横長の巻物に詞書（文章）と絵とを交互に組み合わせて、人物の動きや場面の展開を右から左へと繰り広げる巻物です。鎌倉時代には社寺の由来や霊験などを記した縁起や、有名なお坊さんの伝記を題材にしたものが多くつくられました。これからみていく一遍上人の絵巻もその一つです。

一遍上人（一二三九～八九）は、鎌倉時代のはじめに伊予国（愛媛県）で生れました。一遍上人は、各地をめぐって念仏を唱えるだけですべての人が救われるという教えを説きました。念仏を唱えながら踊る「踊り念仏」をはじめて多くの人びとの信仰をあつめたのです。こうして一遍上人の教えに従った人びとは時衆とよばれました。

一遍上人の伝記を描いた絵巻は、多く伝えられています。これらはまとめて『一遍上人絵伝』といいますが、内容によって『一遍聖絵』と、『一遍上人絵詞伝』（『遊行上人縁起絵』）とよばれるものに分けられます。『一遍聖絵』は一遍上人が亡くなった十年後の正安元年

一遍上人絵詞伝（真光寺蔵　重要文化財）一遍をしのび善光寺で念仏を行う他阿一行。

一遍上人絵詞伝（永福寺蔵）真光寺本と同じ場面だが、境内のようすが異なる。

（一二九九）に聖戒が作った一遍上人の最初の絵巻です。そこには一遍上人が一三才から五一才で亡くなるまでの間に訪れた全国各地の風景やお寺などの建物、人びとの様子が、一二巻にわたる絹の巻物に鮮やかに描かれています。

いっぽう、宗俊がまとめた『一遍上人絵詞伝』はこれよりやや遅れて原本（もとになる絵巻）が出来上がったと考えられています。こちらには一遍上人の生涯だけでなく、あとを継いだ他阿というお坊さんの活躍も詳しく描かれています。たくさんの人びとに必要とされたためでしょうか、同じ絵巻が何本も作られたようです。今だったら印刷や写真、コピー機を使えば同じものを簡単にたくさん作ることができます。けれども、当時は絵巻が必要になった人が、一巻ずつかき写すしかありませんでした。こうしてたくさんの絵巻がつくられたのです。『一遍上人絵詞伝』は、現在でも約二〇本が全国各地に伝えられています。そのため、よくみると同じ場面でも、写した人や写した時代によって少しずつ形や色使いに違いがあることがわかります。

小田切の里の踊り念仏(一遍聖絵　国宝　複製)
信濃国佐久郡小田切里の武士の家で、念仏を唱えるうちに無我の境地に至り踊り出す時衆たち。一遍聖絵の記す踊り念仏の始まりである。

◆善光寺

一遍上人の絵巻には全国各地の様子が描かれているといいましたが、長野県内ではどんな所が登場しているのでしょうか。まずはじめにあげられるのは善光寺です。『一遍聖絵』には一遍上人が三三歳の時、善光寺にお参りし、最初の悟りを得たと記されています。以後、善光寺は時宗にとっても重要な寺院としてあつかわれました。『一遍上人絵詞伝』には、後に他阿が一遍上人とゆかりの深い善光寺を詣で、御前の舞台で日中の念仏を行う姿が描かれています。これらの場面には五重塔や建物の配置など、現在の善光寺とは異なる鎌倉時代の善光寺の風景が広がっています。今からおよそ七〇〇年も前の善光寺のようすを知ることが出来る貴重な手がかりなのです。

◆伴野の市、小田切の里、大井太郎の館

四一歳の時、ふたたび善光寺に参詣(さんけい)した一遍は、佐久地方を訪れています。『一遍聖絵』では、現在の佐久市にあたる伴野(ともの)の市で一遍一行がとつぜん現れた五色の雲に手を合わせる場面が描かれています。ここでは市の開かれない日の閑散(かんさん)とした市場のようすをみることができます。

伴野の踊り念仏（一遍上人絵詞伝　金台寺蔵　重要文化財）

伴野の踊り念仏（一遍上人絵詞伝　常称寺蔵　重要文化財）
一遍上人絵詞伝の記す踊り念仏の始まり。一遍聖絵では小田切里となっている点が異なる。

続いて広がる場面には現在の臼田町にある小田切の里が登場します。『一遍聖絵』によると、一行はこの小田切の武士の館で初めて踊り念仏を行いました。この後広く行われるようになった踊り念仏は、時宗の信仰にとってたいへん重要なものとなりました。場面には館の庭で手にした鉦や鉢を叩きながら拍子をとる者、拍子に合わせて念仏を唱えながら無心の表情で踊る者の姿がみられます。いっぽう『一遍上人絵詞伝』では、佐久郡伴野において一遍が初めて踊り念仏をしたようすが描かれています。ゆかりの地である佐久市の金台寺にも国の重要文化財に指定された『一遍上人絵詞伝』が伝えられています。

さらに『一遍聖絵』には、佐久郡に住む大井太郎の館に招かれた一行が、三日三晩踊り念仏を繰り広げたと記されています。画面には踊り念仏を終えた一行が館を引き上げるところが描かれています。

これらの場面からは、当時の武士の館や人びとの生活のようすをうかがい知ることができます。（伊藤年子）

合戦と屏風絵の世界

（タテ108.5cm×ヨコ272.6cm）

◆川中島合戦の屏風絵

武田信玄と上杉謙信が、信州の川中島平（長野市）で、何度もはげしく戦いあったことはよく知られています。この川中島合戦のようすを描いたもののひとつに、「紀州本屏風」とよばれる「川中島合戦図屏風」があります。これは上杉がたの軍記をもとに、紀州（和歌山県）で製作された六曲一双の屏風絵です。右隻には天文二三年（一五五四）の合戦が、左隻には弘治二年（一五五六）の合戦のようすが描かれています。

この屏風絵をみつめると川中島平のようすがみごとに描かれていることに驚かされます。絵のところどころに地名や人物名などを書いた貼札があって、合戦の情報を補っています。江戸時代の初期に描かれたとはいえ、絵画と文字がセットになった貴重な中世史料といえます。左右両隻の隅には、境内に塔をもった善光寺が静かなたたずまいとして描かれていて、おもわず目をうばわれます。

◆屏風絵に登場する人びと

武士たちが勇猛果敢に戦いあうすがたを描いたもの